



首巻き春貞

政権移譲

松平春貞一代記

十三

松田純一

mactechlab.jp

首巻
春貞（十三）

松平春貞一代記

政権移譲

表紙デザイン junichi Matsuda
イラストAC

主な登場人物

・松平春貞

通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友、第七代藩主徳川宗春とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・幸江

春貞の妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。理子は春貞との娘。理子の命名は吉宗。

・弥生

春貞を生みすぐ亡くなつたとされていた春貞の実母。友子は従者

・小川笙船

小石川養生所初代肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が命じられたが早々と息子丹治(隆好)に肝煎を譲り隠居した。しかし春貞の屋敷の奥に診療所を建てたことから医師を続けることになった

- ・小川隆好
　笙船の息子。養生所二代目肝煎
- ・弥三郎
　養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在だつたが寛保二年（一七四二年）九月一日、享年七十歳で死去
- ・佐吉
　弥三郎の甥にあたる若くして優秀な御庭番
- ・米道格左衛門
　尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長。夏穂の夫
- ・夏穂
　太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になつた
- ・堀田万之助
　尾張藩江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人だつたが春貞の屋敷に加わる。田宮助左衛門の娘秋子と祝言を挙げた。春江館師範。道之助は秋子

との一子

- ・横手富三郎

西国を武者修行で回っていた無外流の遣い手。槍の名手でもあり格左衛門を頼り江戸へ出てきて春貞の屋敷で働くことになった

- ・留吉

春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになったが奈美と祝言を挙げた。棒術の名手になりつつある。吉太郎は奈美との一子

- ・田宮助左衛門

御納戸同心だったが上役に裏切られて浪々の身に。妻は亡くなり娘秋子と二人暮らしだつたが、縁あって春貞に仕え屋敷の一切の切り盛りを任せられている

- ・秋子

田宮助左衛門の一人娘。堀田万之助と結ばれる。一子は道之助

- ・田宮（石川）奈美

木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。父の敵を討つことが出来、春貞の屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つ

・およし

幼少とき女衒に売られ吉原の遊女に。留吉の妹。春貞に身請けされ屋敷内に建てられた診療所で小川笙船の助手となる。井之上新界と結ばれる

・井之上新界

小田原の廻船問屋の息子。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学んだ帰りに小川笙船の門を叩き向島診療所で働くことになった。またおよしを妻に娶る。

・静香

父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だつたが春貞の屋敷で奉公することに。亡き弥三郎に女忍びの技を伝授された

・伊丹鉄太郎

南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手。深雪は恋女房

・徳川吉宗

徳川第八代將軍。長男家重に將軍職を譲つた後は大御所として政権を補佐

・大岡越前守忠相

南町奉行を経て寺社奉行

- ・徳川家重

徳川吉宗の長男として江戸赤坂の紀州藩邸で生まれる。生来虚弱の上、障害により言語が不明瞭であつた。吉宗が隠居後第九代将軍となる

- ・大岡忠光

御側御用人や若年寄を務め、第九代将軍徳川家重の側近として活躍。上総勝浦藩主、武藏岩槻藩初代藩主

- ・田沼意次

徳川家重の西丸小姓として抜擢され、家重が第九代将軍となると将軍の身辺警護の責任者である小姓組番頭に抜擢。後に側用人、老中と出世し田沼時代と呼ばれる権勢を握るに至る

- ・徳川宗勝

尾張藩第八代藩主。幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に春貞や米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕っている

- ・定吉

小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち

- ・政五郎
- ・室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭
- ・岩次郎
- ・須田町で十手持ちと金貸しの二足のわらじを履く
- ・長兵衛
- ・日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だったが隠居。夏穂の実父。妻はお糸
- ・相模屋清右衛門
- ・日本橋両替商相模屋の隠居
- ・三井高房
- ・江戸一の分限者、越後屋の隠居
- ・松谷久四郎
- 西国のある藩で剣術指南役を務めていたが、酒が原因で役目を失敗し罷免となつたが、箱根や三島において雲助たちの親分として慕われ続けた

首巻き春貞（十三）

政権移譲

目次

第一章 いざ戻らん

十頁

第二章 松谷久四郎という男

三八頁

第三章 敵の影

八七頁

第四章 新將軍誕生

一四四頁

あとがき

一九六頁

主な参考文献・資料

二〇〇頁

第一章 いざ戻らん

一

八代将軍吉宗の密命を受けた春貞は数々の襲撃も退けつつ京に到着した翌日、御所を訪ね、時の関白一条兼香に吉宗の親書を手渡すことができた。

さらに思いもかけないことだつたが、兼香の計らいにより時の第一—五代桜町天皇に拝謁を許されたのだった。さすがの春貞も宿に戻ったときには緊張のほぐれが著しくしばし呆然としていた。

禁裏の御学問所で天皇に拝謁したとき桜町天皇は、

「春貞。朕はその方のこと、以前より耳にし会いたいと思つていた」と笑顔で声をかけた。

驚く春貞の表情を楽しむように、

「そう、驚くでない。正直申せば立場上、將軍の挙動に神経を使うが、ときどき
その方の名が見え隠れ致すからのう」

と、桜町天皇は磊落に語りかけたのだった。

春貞はただただ平伏するしかなかつた。

御学問所を辞す際、春貞は御所に入る前から所持していた包みを一条兼香の前に
差しだした。

「なにごとでござるか、春貞どの」

兼香が問うと、

「関白さま。ささやかではございますが江戸土産でござります」

春貞が言いながら包みを開けると包金が十二個現れた。

「こ、これは…」

兼香が驚き春貞を見つめ、そして天皇に視線を送つた。

「お叱りなくお収め下され。

実はこの三〇〇両、それがしに吉宗さまが『密命を願つたのだから、ただ働きは
させられぬ』とお渡し下さったものです。しかし後でよくよく考えますにそれが
しには『お前が禁裏に届けよ』と暗に申されているように思えましてな、葵のご

紋が入った袱紗のままご持参いたした次第。

なにとぞご笑納願いたく存じます」

春貞は平伏しながら思いを述べた。

意外にも一条兼香は、

「なによりの江戸土産、遠慮のういただきます。

われらは幕府の目もあり、常々貧乏暮らしでござりまするでな。助かります」

と破顔すると御座の桜町天皇も笑顔で頷いていたが、思い出したように春貞を手招きした。

兼香が頷いているのを確認した春貞は一間ほど御座に近づくと天皇は兼香に一振りの小さ刀を渡し、兼香は恭しくそれを両手で受けた後に春貞へ向けた。

「今日の記念に受け取つてたも、春貞」

「ははっ」

兼香が笑顔で、

「春貞どの、それは吉宗さまへの土産ではなくお上が御身への土産だと申してあらしやいます」

と補足した。

春貞が手にした小さ刀に目をやると柄、鞘そして鍔に見事な金細工で菊のご紋が光っていた。

ちなみに小さ刀とは殿中差し、小刀のことだ。

こうして桜町天皇との謁見は終わり、密命も果たされた。

御所にいたのは半時ほどだったが、春貞にとつて半日とも一日とも思われるほど長く感じられた。

まだまだ日が高い青空を仰ぎながら御所を退出すると横手富三郎、佐吉そして夏穂と静香が心配そうに待つていて春貞に頭を下げ口々に、「ご苦労様でございました」「お疲れでございましょう」と春貞を労つた。

春貞が笑顔で回りを見渡すとすでに壮絶な戦いの跡は綺麗に清められていた。

「春貞さま。帝に拝謁されるなど時の将軍さまとて実現しなかつたこと。我らも何やら偉くなつたような気持ちでございますぞ」

宿に戻り風呂上がりの春貞に横手富三郎が声をかけた。

「いやはや。正直疲れた…。

とはいえ皆のおかげでな、密命を持つてここ京まで来た使命は無事果たせた。これで大手を振つて江戸に戻れようぞ」

春貞にやつと笑顔が戻ってきた。

その後、富三郎、佐吉そして夏穂と静香が順に風呂から上がってきて春貞の部屋に集まつた。

「父上、これからどのような仕儀と相成りますか。
京見物をなさるご気分ではありますんか」

と夏穂が問うた。

「そうよなあ。確かに一日も早く江戸に戻りたいが、京には昨日着いたばかりだ。そうそう簡単にこれぬ場所でもあるしお前たちは形だけでも京見物をしたいであろうよ」

笑顔で春貞に問われると春貞の気持ちを皆分かつているだけに答えに窮した。

「……」

「でな、十分ではないが明日一日京を富三郎に案内してもらい、銳氣を養おうと思つてゐるがどうだ」

春貞の物言いに、

「わああつ」

と夏穂と静香の歎声が上がり、富三郎と佐吉の頬も緩んだ。

「佐吉。これからは江戸に戻るまで影の者としてではなく俺たちと同道してくれ」

春貞が命じると、

「承知いたしました。

しかし帰路も襲い来る者がおりましようかな」と富三郎と顔を見合わせて呟くと春貞は、

「どうだかな。ただし俺の感だが、俺たちの密命は遂げられ、上様の親書は関白と帝にお渡ししたわけだから、敵も無駄な攻めはしないと思うがなあ」

畠に仰向けになりながら独り言のように言い切った。

翌日一行は富三郎の案内で清水坂を登り清水寺周辺の見事な紅葉を堪能した。

「春貞さま。この紅葉も見事でございますがな、春はこれまた桜に酔うほどの名所でござりますぞ」

富三郎がいいつつ、産寧坂を下りゆるりと円山公園まで歩き一軒の茶屋に案内し

た。

緋毛氈を敷いた店先に陣取りしばし一行は旅の疲れも忘れ軽い昼餉を取りながらそれぞれの思いに耽つていた。

「お屋敷の皆様にもこの風景をお見せしたいものです」
感嘆しながら静香が思わず呟いた。

そしてふと思い出したのか、

「佐吉さま。弥三郎先生はこの景色…京はご存じだつたのでございましょうか」と隣に座していた佐吉に問うた。

佐吉は青空を仰ぎつつ、

「はて、叔父貴は若い頃、大坂・名古屋そして京に長く滞在していたと聞きましたので静香さんの見ているこの景色、きっと叔父貴も一緒に観ているのではありますんかな」

と答えた。

無言で頷きながら両手を合わせた静香に夏穂が肩を寄せた。

その後一行は八坂神社を参拝してゆつくりと宿に向かつた。

京からの戻りは往路と逆に歩んだが、春貞たちの気がかりは近江屋の金右衛門だつた。

御店を後にした際、すでに余命いくばくかと危ぶまれる状態だつたからだ。為に春貞一行は宮宿を通過する際、登城はせず札差近江屋に真っ先に立ち寄つたが、店先には喪中が貼られており不幸があつたことを示していた。

「ち、父上。金右衛門さまが…」

夏穂が絶句した。

「うむ」

春貞らが静寂に包まれていた店の暖簾を静かに潜ると帳場に座していた大番頭が気づいて飛んできた。

「金右衛門殿か…」

「春貞さま…。は、はい。無念でございます。

ともあれ、是非是非お上がりになつて、線香を手向けていただければ大旦那様も

旦那様もお喜びになります」

一行が大番頭に案内され立派な仏壇が備えられた部屋に入ると当主の金次郎がかば放心状態で座していたが、春貞たちの姿を認めて立ち上がった。

「は、春貞さま：三日前でございました。

親爺はいま一度春貞さまにお会いしたい、名古屋をお通りになる際はお立ち寄りくださいるだろうかと心待ちにしておりましたが：」

後は声にならず金次郎は春貞の足元に崩れ落ちた。

「さようか。それは残念なことを…。

まずは線香を上げさせてもらおう」

春貞を筆頭に富三郎、佐吉、夏穂そして静香の四人は仏壇の前でしばし手を合わせた。

一行は金次郎の強い願いもあつてその晩は馴染みの離れに泊まることになった。

「富三郎、佐吉。今夜は金右衛門さんの通夜のつもりでゆるりと飲み明かそうぞ」

春貞は自分に言い聞かせるように呟いた。

翌朝、後ろ髪を引かれる思いではあつたが春貞一行は近江屋をして次の目的

地である三島へと急いだ。

春貞らは三島宿に到着すると一路松谷久四郎の住む雲助宿を目指した。

「父上。松谷さまはお酒の飲み過ぎで胃の腑をやられたと言われてましたが、大分お辛い様子でしたね」

夏穂が思い出したように言つた。

「うむ。俺は医者ではないが小石川養生所で笙船先生の助手みたいなことをやつていたので耳学問だがな、胃の腑より酒の飲み過ぎは腎じんをやられると聞いたな。松谷どのもそうなのではないかと俺は考えておるが、それにな、ろくに医者にもかかるていないうだから心配よなあ」

春貞も渋い顔をした。

「さよう。それがしも酒には目がないほうですが、十日に一日二日、五臓六腑とやらを休ませることが肝心だと聞いたことがありますな」
富二郎が思い出したように言い切つた。

雲助宿に到着すると松谷久四郎の体調は万全とは言いがたい様子だつたものの、帰路にまた春貞らが立ち寄ると知り、何とか床に伏せることは避けたいと酒の量を減らしたり時には禁酒したりしながら待つていたようだ。

荷を降ろし落ち着いた後、

「松谷どの。余計なお節介とは承知の上ですが、医者にかかるてはおられないご様子。近隣にきちんと診てくれる医者はおりませぬか」と春貞が問うと、

「ご心配をおかけし申し訳ございませぬ。

己で撒いた種でもございますし、そう先のある命ではないと覚悟をしておりますので、好きにさせてもらおうております。

またこの近隣では信頼に値する医者もおりませんので無精を決め込んでおります」

と言い訳めいたことを呟いた。

一呼吸入れて春貞が思いもかけないことを言い出した。

「松谷どの。命が長らえれば好きな酒もまた十分に楽しめましょう。

それにお主は剣客、それも大層な腕をお持ちだ。

我らと剣を交えたいとは思いませぬか」

春貞の言葉を聞き久四郎は俯いたまま、

「叶うことでしたらそれがしも是非そうありたい…。

向島の、そう…春江館とやらで米道どのらに稽古をつけてもらいたいと思ひます
がな、この体では早々閻魔が迎えに来るに違いありませぬ。

夢でござりますな」

と寂しそうに呟いた。

春貞はしばし無言でいたが意を決したように、

「分かり申した。ではこうしましようぞ。

松谷どの：我らと一緒に江戸に向かいましよう。

屋敷には向島診療所という医療設備がございましてな、そこではあの小石川養生
所初代肝煎りの小川笙船先生をはじめ、長崎で阿蘭陀医学を学んだ井之上先生も
おります。

酒を些か自重されれば我らと剣を交えることもできましようや」

春貞が言い切った。

久四郎キツと春貞を見据えていたが、その両眼から涙がこぼれ落ちた。

「春貞さま。そのような…夢ののような仕儀、いまのそれがしに可能でしょうか」

富三郎や夏穂らも泣いていたし佐吉も涙を見せたくないのか終始俯いていた。

「夢ではござらぬ。

それがしらと、そう權蔵さんらの駕籠で江戸に向かいましょうぞ。

我が母にして下さつたようにな」

春貞も赤い眼をしながら諭すように呟くと久四郎はがばつとその場で平伏し泣き崩れた。

「あ、ありがたき仰せ。

もし願えれば…厄介をおかけしますが、是非江戸の土を踏み、春江館をこの眼で拝見してから死にとうございます」

久四郎が泣きながら願つた。

「よし、決まった」

春貞が膝を叩きながら決意の声を上げると權蔵らからも歓喜の声が上がった。

「お頭、よかつたねえ」

「わしらは寂しいけどさ、少しの間我慢するからお頭、江戸を見てきなされ」

日々に贊意の言葉が聞かれた。

翌朝、百人あまりの雲助たちに見送られ、久四郎は籠に乗り江戸に向かうことになつた。

駕籠を交代でかつぐのは権蔵ら四人だ。

「太一。それがし最後の願いとなるやも知れぬが、くれぐれも雲助たちと屋敷を頼むぞ」

駕籠に乗った久四郎が声を上げると留守の間雲助たちを束ねる佐川太一は、「畏まりました。

お頭、心置きなくお旅立ちくだされ。

春貞さま、頭をよろしゅうお願ひ申します」

と頭を下げた。

こうして春貞、富三郎、佐吉、夏穂、静香の五人に沿うように権蔵らにかつがれ籠に乗った松谷久四郎は一路江戸を目指した。

ただし、太一を始め五十人ほどの雲助たちがしばし護衛でもするかのように街道の端を見送りながらしばらく一緒に歩いていた。

三

伊豆国から相模国へと進む箱根峠が見えてきたとき駕籠の前を歩んでいた佐吉の足が止まつた。

「物取りか？」

春貞が呟くと久四郎は、

「いや、春貞さま。目当てはそれがしだと思います。

雲助宿を出たのを好機と考え、これまで懲らしめられてきた野武士たちが仇討ちでもと考えたのではござりますまいか」と済まなそうに答えた。

久四郎らは旅人を襲い悪さをする野武士たちを懲らしめ、これまで箱根宿から三島に至るあたりをほぼ制圧してきたが小競り合いは続いていた。

「父上、五十人ほどおりますようで……」

夏穂が鯉口を切つたが佐吉と静香は風のように夕闇に消えていた。
抜刀した野武士たちがバタバタと駆けてきた。

「何者だ」

富三郎が叫ぶと野武士の一人が、
「籠の中の男を渡せ。であればお前たちは見逃してやろう」と低い声を発した。

「断る……」

春貞の一声で一行は完全に野武士たちに囮まれた。久四郎はと見れば駕籠から降り、片手を駕籠に置いて支えられるよう立つていたが、一方の手には愛刀が握られていた。

「夏穂、久四郎どのを頼む」

春貞はそう言いながら珍しく刀を抜き放ち下段に構えた。
「ええい、面倒だ。押し殺してしまえ」

野武士たちが一斉に生き死にの間合いに入ってきた。

瞬間夕日に春貞の刀が煌めいたと思つたら二人の首が空を飛び、夏穂の突きと抜き胴で二人が悶絶し、富三郎が拔刀した刹那これまた二人がなぎ倒された。さらにつどからか静香が放つた大小の鉄片が十五人ばかりの顔や首筋にめり込みのたうち回つた。

そんな春貞たちを何とかかいくぐつた二人が刀を振りかぶりながら久四郎に迫った。

夏穂が動こうとした刹那、左手を駕籠で支えたまま久四郎の右手が円を描くような袈裟斬りに煌めくと二人は血しぶきと共に吹つ飛んでいた。

夏穂は初めて久四郎が剣を振るつた所を見た。それだけで彼がどれほどの力量の持ち主なのかを改めて知つた。

そして久四郎がさる西国の藩の剣術指南役だつたという話しを思い出していた。そんな夏穂の視線に気づいたか、立ち位置はそのまま変えずに久四郎は（大事ございません）とでも言うように笑みを送つてきた。

さすがに野武士たちは戦意を失つたらしくパラパラと林の奥へと逃げていつたが、それを確認したからか、佐吉と静香がふわりと姿を現した。

「春貞さま。すべて引き上げたようです」

佐吉が報告すると春貞は、

「ご苦労でした」と勞つた。

「松谷どの。どうやらここまで様子、駕籠にお戻りあれ」

春貞は久四郎に願い、一行は歩みを再開した。

するとそれまで震えていた権蔵ら四人が俄然元気になつて、

「やはり殿さまたちも強いけど頭も強いよなあ」

と破顔しながら叫んだ。

「松谷どのはタイ捨流ではありませぬか」

春貞は駕籠に戻つた久四郎に問いかけた。

「ほほう、さすがでござりますな。」

この体ではタイ捨流らしい動きなどできませぬが、おわかりでございましたか」

久四郎が驚いたように応じた。

「はい。タイ捨流の特長は：…そう、右半開に始まり左半開に終わり、すべて袈裟斬りに終結する独特な構えと聞き及んでおりましたが、先ほどの円の太刀を彷彿とさせる構えからの袈裟斬りはお見事でした」

春貞が言うと久四郎は恥ずかしそうに、

「今では酒が切れますとな、手に震えが生じて切つ先が定まりませぬ。呑めば震えは收まりますが、今度は体調が悪くなると…まあ昔の面影はございません」

そう自嘲氣味に答えた。

「そういえば、確か…タイ捨流は新陰流とご縁がありましたな」

富三郎が春貞に問うた。

「よう知つておるな。タイ捨流の始祖と新陰流を創始した上泉伊勢守秀綱様は師弟の関係にあつたというな」

春貞が思い出したように呟いた。

タイ捨流の始祖丸目長恵（蔵人佐）は、肥後（熊本県）南部を領していた相良氏の家臣だつた。上京した際、新陰流を創始した上泉伊勢守秀綱の弟子となり、将軍足利義輝の（一五六七年）秀綱より上泉伊勢守信綱の名で印可状を受けたが新陰流を九州一円に広めた後、独自の工夫によりタイ捨流を開流した。

その後、タイ捨流は九州一円に広まり、この頃には肥後人吉藩、肥前一帯で盛んで、中国地方や東北方面にもタイシャ流や丸目流を名乗る流派が存在していた。

「ところで春貞さま。それがしを江戸にお連れいただくことは米道どのらはご承知なのでござりまするか」

籠の中の久四郎が春貞に問うた。

「いえ、名古屋で書いた文で知らせようかとも思いましたがいきなりお連れしたときの彼奴の喜ぶ顔が見たいと思いましてな、文は思い留めました」

春貞は笑いながら答えた。

「いやはや、米道どのの驚き喜ばれる顔が目に浮かびますなあ」
富三郎も破顔しつつ箱根の空を仰いだ。

頃合い由と思つたか、権蔵らが箱根馬子唄を唄いだした…。

箱根八里は

馬でも越すが

越すに越されぬ

大井川く

箱根御番所に

荒井がなけりや

連れて逃げましよ

上方へゝ

西は追分

東は関所

せめて関所の

茶山でもく

「嗚呼、これが箱根馬子唄ですか。

いいですね」

夏穂が感嘆の声を上げると駕籠に乗つた久四郎が、

「さよう、箱根八里とも呼ばれてますがな」

と答えた。

「荒井とは関所の名でございますか」

今度は静香が問うと、

「はい。荒井は浜名湖の側にある関所、今切の渡しといえれば分かりやすいですか

な

久四郎が律儀に説明した。

徳川幕府は今切の渡しを箱根の関所に次ぐ関門とし、厳しい検問で知られていた。したがつて俗に「馬鹿と化物は今切から東にはいない」とまでいわれていた

という。

四

その頃、向島の屋敷では春貞が近江屋の離れで書いた長い文を幸江が嬉々として読んでいた。

「母上、父上はそろそろお戻りでございますか」

覗き込むように理子が幸江に体を寄せた。

「ほら、そう寄りかかられては父上からの文が読めませぬ」

そう言いながらも幸江は居間に座していた田宮助左衛門や米道格左衛門らにその内容を知らせながら読んでいた。

「無事に密命は達成できたと書いてありますよ」

文を読んでいた幸江が安堵の声を上げ、続いて、

「は、春貞さまは…」

息をのんだので弥生が心配して顔を向けると、

「な、なんと。陛下…帝に拝謁されたとあります」

幸江の一言で居間の一団はざわめいた。

「若奥さま、真でございますか」

助左衛門が声を上げた。

「はい。関白さまと共に帝にお会いになつたと書かれております」

幸江の念押しに理子が、

「母上。帝とは京におわす天皇さまのことですございますか」

と問うと幸江は無言で頷いた。

「では母上、天皇さまと將軍さまとではどちらがお偉いのですか」

理子は一同の驚きが理解できずに無邪気な問いを発した。

「ううん。母もよく分かりませぬ。」

田宮どの、教えてくだされ

と話しを助左衛門に振った。

苦笑しながら助左衛門は、

「難しいご質問ですな…」

と断つた上で口を開いた。

「理子さま。形式的には天皇さまの方が将軍さまより偉いのです。
いや、まずは聞いてください。

そもそも將軍とは征夷大將軍のこととしてな。これは延暦十三年（七九四年）頃
からはじまつた蝦夷え夷を鎮圧するための遠征軍の指揮官を意味しました。

遠征の一文字と蝦夷の一文字からなつていてことでお分かりだと思いますがな」
助左衛門は冷めた茶を喉に落として話を続けた。

「この征夷大將軍は天皇さまから命じられるのでございます。そしてもともと武
家は天皇さまの家来でございましたから征夷大將軍は武家の棟梁を意味するよう
になりました。

このようなお話し、無闇に申し上げるべきことではございませぬが、武士たちは
その存在意義でもある武力に優れていることから次第に政治的な力を備えるよう
になりました

「確か、鎌倉幕府ができたあたりかのう」
笙船が口を挟んだ。

「はい。繰り返しますが、あくまで将軍さまは天皇さまに任じられ、政治を任せられているのですな。

となれば天皇さまが将軍さまよりお偉いということです。しかし、それは今となつては形式上でございましてな、実際政治の実権は将軍さまが握つており、天皇さまも将軍さまに言われるままに将軍職を任せし政治をおられます。要は国を治めていく上で：幾多の争いの中で役割分担が出来てきたと申せばよいのでしょうかな」

助左衛門が一息入れると笙船が、

「禁中並公家諸法度という法令がありましたな」と言つた。

「はい。天皇家や公家に対し江戸幕府側が定めた法令ですが、幕府が朝廷を監視するためと誤解されやすいことも事実。しかし実際は江戸幕府の考え方として、天皇の権威を高めることにより幕府の基盤を安泰化させる狙いのようでございますな。

まあ、本当の所いろいろと揉め事はございますが、要は幕府と朝廷は車の両輪のようすえ合つてこの国を治めているということで宜しいのではございますまい

か」

助左衛門が理子に顔を向けると理子は幸江の肩に頭を押しつけて寝ていた。

「田宮どの。理子にはまだ無理な理屈のようでござりますな」

幸江がすまなそうに笑った。

再び文に目を落とした幸江が、

「格左衛門さま。近江屋の隠居さまが亡くなられたとあります……」

と言うと、

「嗚呼、我らがお世話をなつたときも伏せがちでしたから心配をしておりました
が……」

格左衛門が悲痛な声を上げると弥生が思わず両手を合わせた。

それを見ながら幸江は文を弥生に回した。

春貞の文に素早く目を通した弥生は、笠船に渡し、格左衛門そして万之助の順に
回つた。

「どうやら名古屋：宮宿は近江屋さんに一泊されただけで登城はせずとのことで
すからすでに箱根は越えられておりますかな」

万之助は隣の秋子に体をあずけるように眠りこけている一子道之助を眺めながら

呟いた。

「そうか。であれば後五日とかでお帰りでしようかな。

静香さんが戻らないと義歯への取り組みが進みませんしな」

留吉がこれまた一子吉太郎を膝に乗せながら思わず本音をいうと、

「すまぬな、留吉さんや。

承知のようになるべく義歯の注文は受けないようにと気遣いしておるがのう、いくらでも払うから頼むとまでいう分限者が出て来た始末じや。

困つたわい」

小川笙船が少しの酒で赤くした顔で言うと、

「しかし、留吉さんの奮闘のおかげですが、医者が近隣で評判が良いということは滅多にないとも聞きました。であれば嬉しいことですね、先生」

井之上新界もおよしと目を合わせて頷きあつた。

弥生が、

「いかがですか、やはり冬場に向かい風邪の患者さんが多いのでしょうか」と聞くと、

「そうですな、特に子供たちを診ていると診療所に来る者はまともに朝夕食事を

とつていなない者がまだ多いようじや。これでは風邪うんぬん以前に体力がつかないので風邪だけでなく様々な病気にかかりやすいので心配じやな」

小川笙船が茶を啜りながら答えた。

あの「天、一切ヲ流ス」といわれた大水害の爪痕は裏長屋などに住む貧しい人たちをまだ苦しめていた。

「そういえば、い組の頭や岩次郎親分は師走に入つたらしばし炊き出しを始めると言られてましたぜ」

留吉が思い出したようにいうと、

「それはよい。寒くなると腹が減るのは一層辛いからのう」

格左衛門も頷いた。

「ともあれ明後日から早くも師走。

雪など降らぬうちにご一同が戻つてくるとよろしいですね」

弥生が友子と顔を見合させながら襖を少し開け、星空を仰ぎながら呟いた。

第二章 松谷久四郎という男

一

春貞たちは戸塚宿まで来ていた。

本来ならあと二里と九町先の保土ヶ谷宿まで歩きたかったところだが、権蔵らのかつぐ駕籠は四人で交代だつたものの、さすがに疲れは否めず歩みが遅くなつていたからだ。

「春貞さま。今夜はすでにこんな時刻となつてしましました。無理をせずこの戸塚宿で泊まることにいたしましょうか」

富三郎が問うと、

「そうだな。皆も疲れていようからそうしようか」

春貞の意を受けた富三郎と佐吉は脇本陣がある近隣に見えたいくつかの宿を回つて部屋の確保することにした。

しかし、

「少々時刻が遅すぎましたか、空き部屋がございませぬ」

「こちらも断られました。困りましたな」

富三郎と佐吉が困った様子で春貞に報告しに戻ってきた。

「これだけの人数だが最悪男女別の二部屋でもよい。もう一度回つて見てくれ」

「承知しました」

二人が小走りに離れていったとき、前方から二十人ばかりの無宿者か、どたどたと歩いて来た。

春貞たちは小競り合いを防ごうと道の脇に逸れようとしたとき、

「おつと。もしかしたら米道の旦那のおかみさんではございませんか…」

髭面で長身の男が足を止め愛想笑いをしながら夏穂へ声をかけた。

「あら、あのときの親分さんでしたか。お久しぶりでございます…」

夏穂も如才なく言葉を返した。

思えば四年前、春貞の密命を持つて夫格左衛門と留吉と共に尾張へ春貞の実母を探しにいく途中でこのやくざ者と喧嘩となつたのだった。

そのとき夏穂は慣れない長旅で足にマメができ苦しんでいた。

格左衛門の命で一休みしようと座り込みかけたとき、

「じやまだじやまだ、どきやがれ」

とダミ声が響き十人ほどのやくざ者が後ろから駆けてきてしゃがみ込んでいた夏穂を蹴飛ばした…。

と思つた瞬間、どうされたか足を出した男がもんどり打つて地べたに叩きつけられていた。

「このあま、人形みたいな面して舐めた真似をしやがるじやあねえか」

頭目か、髭面で長身の男が後ろから顎をしゃくると男たちが躊躇なく夏穂に近寄つた。

格左衛門と留吉が間に入ろうとすると夏穂は、

「いま私は足が痛くて少々機嫌が悪うございますのでかまわない方が身のためにすよ」

といいながら背を伸ばした。

道行く旅人達が遠巻きに心配そうな顔をしたとき男たちが脇差しを抜いて斬りかかつた。

刹那、夏穂が左右に揺れたと思つたらあつといいうまに三人が石畳に叩きつけられ

のたうち回り、一人が手首を折られ脇差しを落として呻いていた。

刀も抜かずに夏穂は、

「まだやりますか」

と頭目らしき男に一步近づくと、

「ま、まつてくんねえ。お見それしました、おかみさん・いやお嬢さまかな。俺たちが悪かった。この通りだ」

そういうながら髭面の頭を下げたのだつた。

格左衛門が後ろから、

「よし、俺たちも邪魔だつたかも知れん。

これは治療代だ。

しかし以後旅の人たちに悪さをしてはしてはいかんぞ」

と言いながら懷から豆板銀を取りだして頭目に数粒握らせた。

「へい、旦那、こりやあどうも恐れ入りやす」

またまた頭を下げながら十人のやくざ者は這々の体で去つて行つた。

さらに丸子を通り抜け岡部宿に入つたとき、すでに日が暮れていたこともあつて宿が取れずに困惑していくいたところたまたまその髭面のやくざ者に出会つた。

格左衛門が事情を話すと街道の事情に詳しいのか四半時待つてはいると二部屋を確保してくれたことがあつた。

そして格左衛門は礼だと頭目に小判を一枚握らせたのだつた……。

「いかがされましたか、おかみさん」

駕籠かきもあわせると十人が立ち尽くしていたのでやくざ者が問うた。

夏穂が事情を話すと男は、

「これまたご縁でございましょうな。

ようございます。今回もあつしにお任せを……」

と言いながらもそのとき籠から顔を覗かせた松谷久四郎を見て声を上げた。

「これは、も、もしや雲助宿のお頭ではございますまいか」

髭面の男は腰を折り、頭を下げながら近づいた。

久四郎は、

「さよう、雲助の頭目松谷久四郎でござる。籠の中からすまんな」と磊落に声をかけた。

「へつ。あつしは東海道を縄張りにしているケチな野郎でございますが何度も島の雲助宿でお世話をになりました」

そう言つて背を伸ばした男は、

「旦那方、おかみさん、皆様。しばしお待ちになつてくださいせえ。
必ず部屋を確保してきますのでな。

おい、おめえらも宿を中れ

と言いながら走り始めた。その後ろ姿を眺めながら、

「夏穂。随分と風流な御仁と知り合いじゃあねえか」

春貞は苦笑いしながらからかうと、夏穂はその経緯を話し出したが春貞は、

「ふうむ。これだから人との縁は大切にしないといけねえな」

といつづ、

「松谷どの。彼奴をご存じでしたか」

と問うた。

「いや、雲助宿を頼りに転がり込む者は多く残念ながら顔まで覚えておる御仁は
僅かでござる」

頭を搔きながら久四郎は答えた。

しばらく待つていると髭面の男は満面の笑顔で戻ってきて、

「おかみさん。そこの中村屋でございますがね、広めの部屋を三つ確保いたしました。ご自由にお使いくださいやし。

どうぞこちらへ…」

と頭を下げた。

春貞らは言われたとおり男の後について行つた。

「こちらでござります…。

おい、俺つちの大切なお方たちだ。

粗相のないようにしねえな」

出て来た番頭らしき男に大きな声をかけると番頭は、

「承知しております。

親分さんのお頼みではお断りできません。

誰かあ、すすぎをな、十ご用意しなされ。

団体さんがお着きですぞ」

と声を上げた。

暖簾を潜り出て行こうとする髭面の男に春貞は、

「世話をかけた。名は何という」

穏やかに声をかけ、懐から小判一枚を取り出して握らせた。

「へつ。こりやあどうも。

あつしはただのばくち打ちでございます。名乗るような名ではございませんが田次郎と申します。へい。

失礼ではございますがお侍さまは米道の旦那のお友達でございますかい

田次郎と名乗つた男は機嫌良く問うた。

「まあ、そんなところだ」

春貞がいうと夏穂が、

「こちらは松平春貞さまでございます。

私の義父であり屋敷の主人さまです」

と補足すると、

「へつ。こ、こ、これはまた恐つそろしいお方に出会つちました。

ということは、もしかすると江戸向島の首巻き春貞さまで

と喉に詰まつたような素つ頓狂な声を上げた。

「さようでございますよ」

夏穂が応じる隣で春貞はにこにこ笑いながら、

「俺の名などどこで知ったのかい」

と磊落に問うと、

「へつ。雲助宿で酒を馳走になつたときにやつらは自慢げに、春貞さまの舍弟であるお侍様の話しが出まして。そこで主人の松平春貞さまというお方はめつぽう強くて公方様と差しで話しができるお方だと、てめえの事のように自慢げに話してくれまして、へい」と口ごもつて、

「ふうつ。く、首が繫がつていてよかつた。

あつしは、こ、これで失礼いたしやす」

冗談とも本気ともとれる物言いをしながら田次郎は大きな息を吐き、頭を下げて闇に溶け込んだ。

思わず富三郎や佐吉、静香が声を出して笑つた。

ここで一泊し明日の朝、早めに發てば夕刻には江戸に着くに違いない。一同の顔に安堵の表情が浮かんでいた。

戸塚宿を朝立ちした一行は一路江戸を目指した。

「松谷どの。昨晩は酒もほとんど飲まれなかつたようですが、お体はいかがでございますかな」

春貞は駕籠に乗つた松谷久四郎を気遣つた。

「お気遣いいただき恐縮でござる。

お屋敷の方々、そう弥生さま、米道どの、そして留吉どのらにお会いするのですからできるだけ酒を体から抜こうと思ひましてな。

しかし呑まないと手に震えが出ることがあり厄介な体でござる」と答えた。

「屋敷に着き、一休みいたした後はなるべく早く診療所の先生の診断を受けて下され。

失礼ながら今更酒を一滴も飲んではならぬなどとはご無理でございましよう。なんとか先生らのご指導に従い、我らと竹刀を交えられるようお務めください」

春貞がいうと久四郎は籠の中で、

「はつ

と頭をさげた。

「まあ、屋敷の面々は…そう、それがしも含めて酒好きが多ござりますし、小川

笙船先生ご自身も量はともかく酒は好きな御仁。

お体の様子を見ながら楽しみましょうぞ」

久四郎の健康状態を聞かされている富三郎もそう言いつつ無理な禁酒は勧めなかつた。

二

その日の暮れ七つ半頃、一行はやつと竹屋の渡しで舟二艘を借り切り大川（隅田川）を渡つた。

「嗚呼、これが大川でござるか。

着いたのですな」

久四郎が権蔵らに支えられつつ向島の船着き場に上がつた。

「松谷どの。向こうに見えますのが我らの屋敷でございますぞ」

富三郎が指さすと久四郎は竹林の影から見える二棟の蔵の屋根と開き門を見つめ

ながらガクガクと頷き背を伸ばした。

門前に至るところ留吉が廻りを掃いていた。

「あつ、旦那。春貞さまだあ。

お帰りなさいま・」

そう言いながら後ろに立っていた人物を見て簾を放り出し駆けてきた。

「これは、松谷さまではございませんか。

驚いた・」

「留吉さん。しばらくお屋敷で厄介をかけることになり申した。
よしなにお願いいたす」

久四郎が頭を下げるとき首を横に振りながらの留吉は、
「大奥さまや格左衛門の旦那が大喜びいたしますぞ」
と破顔した。

「大変だあ。旦那がお帰りになりましたぞ。

それにお客さまだあ」

留吉が叫びながら母屋に走った。
屋敷の玄関は歓喜の渦となつた。

「お帰りなさいませ」

と和やかに迎えた幸江の言葉がかき消えるほどの騒ぎとなり理子が春貞に飛びついた。

留吉の叫びに玄関には幸江、弥生、友子がすすぎを用意して出迎え、春江館からは格左衛門、万之助が飛び出してきた。

「これこれ理子。お客様がご一緒だ。礼を欠いてはならぬぞ」

苦笑しながらも春貞の表情は嬉しそうだった。

久四郎の姿を認めた格左衛門は両腕を大きく広げながら駆け寄り久四郎の肩を抱きしめた。

「しばらくです。ご無沙汰です」

といつた挨拶もなく、ただただ二人は肩を抱き合い手を取り合つて泣いていた。

我に返った格左衛門は久四郎に肩を貸して三和土に誘うと一方の肩を弥生がこれまた涙ながらに支えていた。

久四郎は声も発せずしゃくり上げ続けていた。

客間に通された久四郎は幸江が用意した座椅子に寄りかかりながら物珍しそうに

室内を見回していたが、

「これが、夢にまで見た向島のお屋敷でございますな」と静かに呟いた。

「いやはや、驚きました。

まさか松谷どのがご一緒とは」

格左衛門があらためて挨拶すると春貞は、

「お主たちを驚かそうとな、文には書かなかつたのだ」と笑つた。

一服の茶を運んで来た弥生は久四郎に、

「その節は大変お世話になりました。おかげさまでこうして息子と穏やかに暮らしております」

手を突き頭を下げる久四郎が慌てた。

診療所の後始末が済んだ小川笙船、井之上新界そしておよしの三人も客間に集まり家族の紹介が和氣藹々と始まつた。

「松谷どのはお体の具合が良くない。

でな、ここには笙船先生を始め名医が三人もおるからとお誘いしたのじや。

ということでしばらく屋敷で静養なされ、出来うるなら春江館で竹刀を交えたいとのご希望じや。

皆の者、よろしく頼んだぞ」

春貞が願うと一同が「ははつ」と頭を下げた。

「松谷久四郎でござる。

普段箱根や三島宿の雲助宿で過ごしている山猿でございます、がさつな点はお許しくだされ。

この度春貞さまよりお誘いいただき、夢にまで見たこのお屋敷で一時を過ごさせていただくことになりました。

よろしゅうお願ひ申す」

久四郎は畳に両手を突けて頭を下げた。

その両手を持ち上げるようにした幸江が、

「お手をお上げになられてごゆるりとなさいませ。

いましばらくお待ちいただければ夕餉のお支度ができます。

松谷さまご歓迎の宴をいたしましょうぞ。

その前に旅のお疲れをお風呂で癒していただきましょうか」

そう言い残し、他の女衆共々一礼して立ち上がつた。

急遽料理人の富四郎が工夫した膳が客間に並べられたが、左右に春貞と幸江そして弥生に挟まれ上座に座らされた久四郎は落ち着かない様子だつた。

それを察した格左衛門が、

「松谷どの。お主は客人じや。

どんとふんぞり返つてくだされ」

と声をかけると、

「いややはや。四年前、米道どのらとお会いしたときから命のあるうちに江戸へ、いや…この向島のお屋敷を尋ねたいと夢を見ておりました。

まさかそれが現実となるとは…。

どうにも、いまにも夢が覚めてしまうのではないかと落ち着きませぬ

と笑つた。

「それにしても、美味そうな料理でござりますな」

眼前に置かれた膳を前にして久四郎が感嘆の声を上げたが、白米と汁もの、魚の

焼きものの他に慈姑^{くわい}しんきんが添えられ、京漬物もあつた。

また徳利が乗つっていた。

ちなみに慈姑は水田で栽培する野菜で、地下茎の先端が肥大したものが、一つの根に沢山の子がつくことや、頂部に芽が出ている所から、目出度い食べ物として祝いの料理や正月料理に用いられる。

（くわいをわさびおろしにておろし、つみ切り、油上げにして、だし、醤油にて塩梅として出す）

と延享三年（一七四六年）に出版された「黑白精味集」にある。

「それでは松谷久四郎どのをお迎えすることが出来たこと、そして我らが無事戻れたことを祝い膳を囮もうぞ」

春貞の簡素な前口上が済んだ。

「ようまいられた」

「お帰りなさいませ」

「いただきます」

の声で皆がそれぞれ箸を手にしたり手酌で酒を飲み始めたが久四郎は酒に手をつ

けなかつた。

「松谷さまは、江戸は初めてでございますか」

幸江が笑顔を向けた。

「はい。西国のある藩を出てから箱根辺りまでは幾度か行きつ戻りついたしましたが、当時のそれがしにとつて江戸は生き馬の目を抜く怖いところという印象がございましてな、足を向けずにおつたのです」

久四郎が答えると、

「いや、確かに江戸は怖いところ。

それがしも甘く見ていたわけではないものの、江戸入りしたその日に財布ごと持つて行かれましたからな」

富三郎が肩をそびやかしながら言つた。

夕餉が終わり女衆により茶が運ばれた。

箱膳が片付けられると久四郎があらためて春貞に向かい手を突いた。

「春貞どの。こうして皆様方と膝を交えてお話しできることは望外の喜びでござるが、明日からそれがしはいかがしたらよろしいでしようかな」と問うた。

「まずはお手を上げてくだされ」

破顔した春貞も久四郎に体を向け、

「松谷どの。気分を変え、日々の生活環境を変えることで少しでもお体がよき方に向かうようにとここにお誘い申し上げたのです。

すでに師走。何をお願いするつもりもございませんねゆえ、江戸の正月を我らと一緒に楽しんでいただければ嬉しゅうござる。

具体的にはさきほども申し上げましたが明日から取り急ぎ診療所にて先生方の検診をお受け下され。

後は我らに秘密などはござらん故、屋敷内のどこへでもご自由に散策され体調が宜しければ春江館で竹刀を取つていただくのもよし…」

一息入れて茶を飲んだ春貞は、

「まずは、雲助の頭領という重荷を降ろしてくだされ」と願つた。

「ははっ。ありがたき仰せ。

春貞どののお言葉、肝に命じまする

久四郎が平伏した。

翌朝、松谷久四郎はどこからかただよつてきた朝餉の支度の香りに心地よい朝を迎えた。

目を覚ました一瞬己がどこにいるのか迷つたが、昨日松平春貞の屋敷に到着し逗留している事を思い出し安堵した。

そして昨晩酒に手をつけなかつたにも関わらず、ふと寝床に起き上がりつてみると不思議なことに手に震えがないことに気がついた。

「松谷の旦那、お目覚めですか」

留吉が襖の向こうから声をかけた。

「おはようござる。いまよき香りにつられて起きたところです」

久四郎が伸びをして襖を開けた。

「おはようございます。

お支度ができましたら居間の方にお越しいただきたいとのことです。

朝餉の支度が始まりますでな」

留吉がそう声をかけた。

「かたじけない。

身仕度して伺います」

久四郎が破顔しながら答えた。

「春貞どのの屋敷で迎える最初の朝だ。

俺は竹刀を持つようになれるのだろうか…」
そんなことが頭の隅をよぎつたが、

「俺はその為にここに連れてきていただいたのだ」
久四郎は着替えながらひとり呟いた。

「おはようござる。

遅くなりましたかな…」

居間に入ると春貞や弥生らが和やかに、

「おはようございます

「おはようござる」

と声をかけてきた。

「どうぞ、こちらへお座りください」

春貞の勧めのまま、その隣に久四郎は体を揺すりながら座した。
「松谷どの。我らに遠慮はいりませぬ。

足がお悪いことは承知しておりますのでお崩しください」

春貞に言われ無言で膳のまえで楽な姿勢で部屋を見回した。

奉公人は別として昨晩ひとりひとりを紹介してもらつたこともあるが、米道格左衛門と眼が合つたとき、格左衛門は笑顔で頷いたが、それを見て不覚にも目頭が熱くなつた。

「俺は間違いなく江戸にいるんだ。

春貞どのの屋敷にいるんだ」

という実感が湧いてきた。

「松谷さま。よく眠られましたでしょうか」

弥生が声を掛けると、

「はい。これほど全身を弛緩させ横になりましたのは久しぶりでございます」

久四郎が破顔しながら答えた。

「それに、不思議ですが昨晩酒を嗜みませんでしたが、いつものように手が震えませぬ。きっと手足も安心しているのでございましょうや」

と小川笙船に向かつて微笑んだ。

「いやいや、松谷さん。それは冗談ではなく体に異常が出るのは五臓六腑が悪い

というだけではありますんでな、我々は心の持ち方によつて体に変化が出る不思議で微妙な生き物でしてな」

笙船は井之上新界と額き会いながら答えた。

新界は、

「松谷さま。お食事が済み、一休みされましたら是非診療所にお越し下さいませ。一般の方への診療が始まりますと混みますのでその前に笙船先生とご一緒に診断をさせていただきましょう」

と両手を膝に置き願つた。

「承知した。こちらこそ宜しくお願ひ申す」

久四郎は真顔で頷いた。

朝餉が終わると久四郎は早速診療所に足を向けたが途中にある春江館をそのまま通り過ぎる気持ちにはなれなかつた。

「米道どの、少しばかり：診療所に入る前に道場を拝見できませぬか」

と久四郎は格左衛門に願い春江館に向かつた。

笙船が書いた扁額を仰ぎ見つつ久四郎はしばし動かなかつた。

「夢にまで見た春江館道場ですな、米道どの」

感激きわまつたか喉に引つかかつた呻くような声で呟いた久四郎は促されて道場内に立ち入つた。

神棚に頭を下げた久四郎は決意を秘めた声で、

「思つていた通りのご立派な道場ですな。

これで気が晴れました。

診療が終わつた後にゆるりとお邪魔いたす」と踵を返した。

診療所に迎えられた久四郎は神妙な顔つきで小川笙船、井之上新界そしておよしの前に座した。

最初に笙船が、そして新界がそれぞれの立場で問診し診察を行つた。

「先生方、それがしの胃の腑が悪いのは酒が原因であることは明白。

すでに覚悟はできておりますので忌憚のないお話しをお聞かせいただきたい」

久四郎は頭を下げた。

「承知した。わしらも春さんから貴方のことは詳しくお聞きしてますでな、医者

として真摯に結果をお話したいと存ずる

笙船もそう言い切つた。

深く息を吸い吐き出した笙船は新界と視線を合わせた後に口を開いた。

「松谷どの。確かにお主の体は酒漬けのようじや。

普段我ら医者は患者のことを思えばこそ、深刻な病気の場合は本当のことを言わずに済ますこともありますのじや。しかしお主は剣者でありいま一番知りたいのは後どれほどの命であるのか、そしていま一度酒を断てば春さんや、そこにおられる米道さんたちと竹刀を交えることが出来るかを知りたいに違ひあるまい」

笙船は一息入れると久四郎は無言で頷いた。

「それでは申そうかのう。

わしの見るところ、松谷どの。お主の命は長くて一年、もしかすると半年ほどかも知れぬ」

笙船が言うと新界も静かに頷いた。

「確かに五臓六腑、特に胃の腑はいわば爆発寸前じや。

酒の飲み過ぎは胃の腑だけでなくすべての臓器、特に心の臓やおつむに至るまでに大きな影響を及ぼしますのじや。

自覚があるかどうかともお聞きしたいところじやが、集中力とか記憶力も低下する。そしてな、次第に人格も壊れて怒りっぽくなったりもする。

では酒を飲まなければよいと思うが、これはすでに病氣でな、飲まずにいられないと汗をかいたり手足が震えたり、時には幻覚を見たりもする…」

笙船は改めて久四郎の瞼を押し上げ、舌を診た後で続けた。

「ただし、貴殿の体が不調なのは酒への依存症もあるものの、胃の腑に潰瘍があるようじや。」

聞けば時に酒を断つこともできるというし、こうして江戸へ来てみよう、春さんらと一緒に稽古をしたいという意欲があるのじやからおつむまでは犯されておらぬと見た。

まあ、酒が…酒だけが原因かはわしらも分からぬがな。とかく酒好きは酒だけで腹が膨れるものと思い込んでおるふしがある。しかし体によき食べ物もとらぬことにには病氣にもなるものじや。

ともかく酒による体力低下と共に潰瘍が大分進んでおるしいまの医学では残念ながら直せぬのじや、松谷どの」

「ふうつ」

と息を吐いた久四郎に今度は新界が話しかけた。

「ただし、松谷どの。我ら医者にも見立て違ひといふこともござりますし、どう

いう理由かは分かりませぬが腫瘍が自然に消えてしまうこともまま有り得ます。人の体は実に不可解で神秘なものとして、心の有り様が体に作用することも知られています。

貴方さまが新たなる意欲を持ち、この屋敷で養生と同時に鍛錬なさろうとするなら笙船先生が申しました寿命も変わつてくるやも知れませぬ。

またお薬を処方いたしますので朝夕必ず飲んでください」

新界が諭すように説明すると、

「ありがとうございます存じます。

己で撒いた種。誰を恨む者でもございませぬしこの後に及んで命が惜しいわけではございませぬ。

しかしこうして江戸に、夢にまで見た春貞さまのお屋敷に来られたのですから命の限り楽しみたいと存ずる」

久四郎は覚悟の面構えで笙船と新界に頭を下げた。

三

師走も早中日となり、新玉の年を迎える慌ただしさが屋敷内を包んでいた。

その日は室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭、政五郎らにより松飾りの設置が行われていたし、田宮助左衛門は弥生の従者友子、そして料理人富四郎と共に行商人や棒手振たちと相対していた。

春貞の屋敷は米など量が多い食材や炭といった目方がかかる物は大川を越えた常連の御店から購入していたが、助左衛門が屋敷の経済を切り盛りするようになつてから行商人が繁々と通うようになつていた。

そういうえば江戸の町は物売りの声で一日が始まつたといつて良いかも知れない。

早朝やつてくるのは豆腐、しじみ、納豆などを売りに来る棒手振たちだつた。

彼らは天秤棒に荷をかつぎ「とうふ！」といった売り物の名を景気よく声に出しながら売り歩いた。

彼らが扱つた品物は先に挙げた豆腐などの他に魚や野菜はもとより、油に味噌醤油、塩、菓子、薬、季節によつては金魚や鈴虫、あるいは簾や桶、針や糸などな

ど多彩なものがあつた。

棒手振らにしてみれば大川を渡つても町屋は少ないものの春貞の屋敷が目当てでもあつた。

三日おき、五日おきに顔を出せば田宮助左衛門が何らかの買い物をしてくれるという算段があつたし、助左衛門にとつては物品購入だけでなくそれら棒手振たちの噂話などから川向こうの出来事などを知る拠り所にもなつていた。

さらに生鮮食料品は料理人富四郎の目が厳しいことが幸いし、本当に新鮮でよいものを持ち込めば必ず買つてくれるることを知つた棒手振たちにとつても上得意であつた。

棒手振は職人らと違ひ天秤棒一本あれば誰にでもできる商売だつたが、かといつて彼らが好きな品物を自由に売り歩けたかと言えばそうではなく、免許鑑札が必要だつた。

万治二年（一六五二年）幕府の調査によれば当時江戸の北部だけでも棒手振は五九〇〇人、五〇業種にも及んでいたという。

一通り、魚と野菜、漬物といった棒手振が去つた後、少々腰の曲がつたお婆が行李を風呂敷に包み、肩に担いで針と糸を売りに来た。

「針、針売りだよ。みすや針はいかが？」

竹屋の渡し側から診療所脇を通つて勝手知つたる助左衛門の離れまでくると秋子と友子が飛び出してきて算盤をはじいていた助左衛門に、

「田宮さま。針と糸を購いたいのですが：」

「父上、針通りが悪いものが多くなりましたので少しまとめていただきたいのですが、ねえ友子さま」と二人して願つた。

「そうかそうか。ではお婆に良いものを見繕つてもらえ」

破顔した助左衛門がお婆に顔を向け、

「代金はいつものようにそれがしがお支払いするでな。額を後で教えてくれ」とその場を離れた。

針の選択はすぐ決まつたようだが、一緒に見せられた縫い糸の中に気に入つたものが多々あつたようで秋子と友子は楽しそうにお婆と話しながら選んでいた。

その姿を母屋から出て来た春貞と幸江が笑顔で眺めていたが、

「そういえば針売りは他の棒手振と違い年寄りがほとんどだな。この寒さはこたえるだろうに」

と春貞が気遣うと、

「針とか縫い糸は魚や野菜と違つて重くありませんし嵩張りません。したがつて年寄りでもできるんだと聞いたことがあります」

幸江が応じた。

その針と糸の購いも決まつたらしく助左衛門が代金の他に心付けを握らせていた。

「お、お侍さま。代金の他にこんなにいただく謂われはないですだ…」

と驚くお婆に助左衛門は、

「お婆。すでに師走も中日で新玉の年も間近。

これはこの一年世話になつたお礼じや。

遠慮のう受け取つて下され。そしてな、また来年もよろしゅうな」とお婆の肩に手を置き屋敷に入つていつた。

針売りのお婆は不思議な顔をしながらも丁寧にお辞儀をして帰つて行つた。そんな風景を横目で見ながら、

「頭、毎年のことだがすまねえなあ」

春貞が松飾りを整え終わつた政五郎に声をかけた。

「とんでもねえ。

しかし春さん、一年経つのは年々早くなつてきまさあ
腰を伸ばしながら政五郎が笑つた。

「ちげえねえ」

と春貞が応じると回りに人がいないことを確かめ声を潜めた政五郎は、
「春さん。二人きりのようなのでお伝えしますが、あのお金から伝言で、春さん
がお帰りになつたら都合をみて登城せよとの命でございましたぞ」
と言つた。

あのお方とは八代将軍吉宗のことである。

旗本の冷や飯食い得田新之助を装い、時に江戸の町を歩き回ることがある吉宗だが、
そんなときには「い組」に顔を出すことが多かつたのだ。

「ほう、そうか。

その仰りようでは急ぎではないな

「へい」

「後数日で旅の後片付けができると思うで、その後に登城してみることにしよ
う。」

旅の報告もしなければなるまいからな」

春貞が襟首を縮めながらそう言つた。

「寒いはずだ、春さん。

雪が降つてきましたぜ。

野郎共、そろそろ引き上げるぜ」

政五郎らも引き上げ時と道具を片付けはじめた。

その頃、松谷久四郎は春貞の許しを得て春江館の床に座していた。
ちょうど商家の娘、女衆たちが二十人夏穂と理子らに稽古をつけてもらつている
時間帯だった。

「これまた噂の女子稽古を拝見しておりますが、それがし西国ではこのような道
場、見たことがありますぬな」

小声で隣の格左衛門に呟いた。

「それがしもここに来るまでは存じませんでしたな。ただし春さんや若奥さま曰
く、これからは女子の弟子も増えてくるに違ないとおっしゃつてますがな」
「なるほど。よく言われるようになりますに剣術で身を立てる時代ではありませんで
な。自然におっしゃるような時代になりますかな」

そんな話しをしていると時刻は早くも明け四つ半になり、商家の女衆が神棚に一例して着替えのため道場に併設されている居間へと向かつた。

頃合いを見計らい久四郎はゆるりと立ち上がり、

「米道どの、今日は初日でござる。体調もまづまづなので素振りをさせてもらえませぬか」

と願つた。

「無論のこと、木刀あるいは竹刀でもご自由にお使い下され。

ただしご無理はされませぬよう」

格左衛門は道場板壁側に整然と並べられている木刀を示しながら答えた。

久四郎は神棚に一礼した後、道場の床の感触を確かめるようにすり足で移動しながら木刀を青眼に構えていた。

微動だにしないその体からは陽炎のように熱気が立ち上つているように格左衛門には思えた。

その翌日から久四郎は己の稽古とは別に女衆の稽古を見るようになった。

弟子たちも（このお方は箱根の雲助宿の親分だ）という春貞たちの物言いをそのまま受け取ったのかは分からぬものの、客分として暫く滞在するという久四郎

に興味を持ったからか好んでつきまとつていたし、久四郎も雲助宿で見せる厳しい表情とは裏腹の温和な表情で教えることを楽しんでいた。

四

師走の十九日、春貞は昼過ぎに登城するつもりで目を覚ました。

尾張国への旅で見聞きしたことや藩主徳川宗勝の意向は勿論、京の御所に吉宗の親書を持参し関白はもとより時の一五代桜町天皇に拝謁したことなどを報告するつもりだった。

しかし昼前に数十騎の人馬が屋敷の門前を騒がせたと思つたら吉宗の方からやつてきた。

「春貞。大儀であつた。

登城せよとの命、聞いたであろうが余は気が急いてな。

今年最後の鷹狩りの帰りに立ち寄らせてもらつた。許せ」

吉宗は機嫌良く大きな声で春貞を労つた。

勝手知つたる客間にどかりと座した吉宗は、

「それにな。よくよく考えてみれば、お主に託した密命の話しじや、城中では話しづらい：聞かれてはまずいこともありますうかと思つてな」と自虐的な笑いをこらえるように言い切つた。

「ははっ」

春貞が畏まつて、

「上様。その密命、仰せの通りお陰様を持ちまして無事役目を果たしましたが文にした通り犠牲も多ございました」

また、上様はもとより家重さまにお変わりなく安堵いたしました」と平伏しながら報告した。

ちょうど茶を運んで来た幸江に春貞は、

「上様と内密の話しが終わるまで皆にはここに近づくなと申し伝えてくれ」と命じた。

吉宗との話しさは次期将軍が家重であること、大御所として吉宗が後見役となることなどまだまだ公言できない内容を含むであろう事を考慮したからだ。

「かしこまりました」

幸江が平伏して出て行くと、

「この屋敷にはすでに家重も何度か参ったし秘密を漏らす者もおらぬだろう。気を使わなくとも良い」

吉宗は破顔した。

「ありがとうございます。ただ信頼できる友ではございますが今回の旅の途中で知り合った客が一人参つておりますので念のためでございます」

と春貞がいうと、

「ほう。旅の途中というと尾張の人間か」

好奇心を持ったか吉宗が問うた。

「いえ、実は上様。我が母が尾張から江戸に運ばれるときにも大変世話になつた御仁ですが、箱根・三島宿の雲助たちを束ねる松谷久四郎と申す者でございました、さる西国の藩にて剣術指南役を務めておつたと聞きました。

酒でお役目を失敗した御仁ゆえか酒で体を壊しております。しかもしもともと腕の立つ御仁、我らと竹刀を交えてから死にたいと申しますので是非もなしと江戸にお連れいたした次第です」

春貞は要領よく松谷久四郎との経緯を話した。

「面白そうな男よのう。

後で紹介しろ春貞」

と笑顔で言い切つた吉宗は真顔になつた。

「さて、早速宮廷は余の願つた通りに話しを進めるようにとの内諾を伝えてきた。お主のおかげぞ。

ただしこれまたここだけの話しだが、余が將軍職を譲るのは来年の半ば過ぎになるであろう。それまで混乱無く支度と心つもりをしていかねばならぬ。

これからが正念場ぞ」

吉宗は茶に手を付けながら言い切つた。

春貞はしばし無言でいたが、

「上様。正直申せば：畏れながら將軍職をお譲りになることは幕府の政でございましょう。

ただいま上様は『混乱無く』と申されましたが、文にてご報告申し上げました通り、尾張や京への旅の途中多くの命が失われております。お叱りを承知で申し上げればこれすべて老中のなにがしかの差し金と思われます

し、これを放置なさればさらなる災いを呼ぶやもしれませぬ。

このこといかに」

強い調子で春貞は吉宗を直視した。

「わ、分かつておる。

以前にも何度も申したが残念ながら政には矛盾が多くあるものじや。

物的な証拠はないものの余も春貞、お主の考へておる者が首謀者であろうかと思つておる。

しかしな…」

苦渋の表情で吉宗は冷めかけた茶を喉に落として、

「まず乗邑を廃することはいまは無理なのじや。

いや、まずは聞け…」

吉宗は松平乗邑という男はどのような人物なのかを初めて語り出した。それによれば一言でいうなら（くそ眞面目）な男なのだという。

その上に己に厳しく他者にも厳しい人物…。

享保の改革は幾多の天災で多々挫折せざるを得なかつたが、現在も含めて松平乗

邑の存在なれば改革は前に進まないのだという。

「お主の言いたいことはわかる。それとこれとは別だと言いたいのであろう。しかしな、人という者は奇妙でな、クソ眞面目といいういわば長所と思われるべき所が同時に欠点となり弱点となる」

「……」

「まずな、お主が心配してくれたが奴が己の意を通したいが為に余や家重の命を奪うという心配はないと思つてゐる。

余談だが年が明けたら奴にこれまでの働きに報いるため加増を考えているほどじや。奴はそれほど幕政にとつて必要だつたし働いたことは確かじや。

それにな、奴が家重を廃嫡しようとしたのは変な話だが自己の為では無いのじや。奴なりに幕政の将来を真剣に考えた上での決断よ。

でな、城中には奴と意見の違う者もおるがあからさまに敵対する者もおらんかつたがそこに春貞、お主という伏兵が現れたということよ。

いや、お主はそうは思つていないとしても奴はそう考えたのじや。

それも城中の重臣たちであればそれなりの敬意を払う必要があるがお主は幕政に関与していない人間……。

その松平春貞という男が何故余と深いつながりを持ち、かつ影響を与えるのか、あのクソ真面目な堅物の男の頭では理解出来ないのであろう」

「深いため息をついた吉宗はいきなり、

「春貞。奴の趣味を存じておるか」と問うた。

「いえ、存じませぬし知りたくもございませぬ。

彼奴のために我が屋敷の者が刺客に襲われ、旅の途中に三度も襲撃を受けました。

金で請け負った者はともかく、京での襲撃は明らかに武家の者たちでございました。畏れながら趣味云々の問題ではございませぬ」

珍しく春貞は吉宗に異を唱えた。

「余とてそうした事実を存じておるし忘れると申しているのではない。

彼奴という男、その方らが敵とするなら敵のあらゆることを知るべきだと申しておるのじや」

吉宗は諭すように続けた。

「奴の唯一の趣味は茶の湯よ。

彼奴は単に茶の湯を楽しむだけでなく、名物茶道具の所蔵品はもとより古今東西の名品、他家からの借覧道具に至るまでを克明に記録しているのだ。

でな、無論名物茶道具を収録したいわゆる名物記といつたものはあの利休門下の山上宗二が記した『山上宗二記』や『玩貨名物記』などがあるが、いずれも所蔵先や茶器名・形姿などを簡略に記すのみであつた：」

「おお、茶を煎れなおしてくれたか、ありがたい。

幸江、すまんが頼みついでじや。

茶漬けを馳走してくれぬか」

再び茶を運んで来た幸江に吉宗は機嫌良く願つた。

「畏りました。

すぐのご用意いたします

と幸江が下がると、

「話しの続きだが、奴の名物記を一二度見せられたが、あの精緻な記録はきっと後世に残ると思うほどでな、自らの所蔵品を含めて茶器名、所持者、購入年月日、借覧年月日、寸法、付属品などを逐一記していくだけでなく茶器図まで描かれておつた。

物事の記録はああでなければならぬという見本みたいなものだつたが、裏返して考えれば物事を、己の信じることは突きつめねば気が済まない病的なものも感じたわ」

一呼吸入れて、

「それほど緻密な仕事をする男がじや、春貞……。今般なぜ次期将軍に宗武を推すことに拘つたのか。それもお主らを亡き者としようとするほどにじや。当然なことだが、次期将軍の任命は余の命により決定する。奴に、老中共に権限があるわけではない。分かるな」

「御意」

「余は確かに一時期迷つてはいた。しかし乗邑に意見は聞いたが思いを話したことはない。

ということは……」

「次期将軍さまに宗武さまが就任されるかどうかは誰にも分かりませぬな」春貞も吉宗の話の流れが分かつてきたのかそう受け答えをした。

「そうよ。彼奴が世渡り上手で余の顔色を伺つてばかりの男なら……春貞、もしお主が乗邑ならどうする」

吉宗の問いかけに春貞は即座に、

「家重さま宗武さまのどちらが就任なされても、己の地位を守れるよう曖昧に動きますな」

と言い切つた。

膝を叩いた吉宗は、

「そのとおりじや。

そこが彼奴の弱点でもあり、クソ眞面目故か猛進すると回りが見えなくなつてしまふのかも知れぬ」

「しかし上様。くどいようではございますが、ことは趣味のことではございません。人の命がかかつております」

春貞も執拗に食い下がつた。

「分かつておる。

よいか春貞。余が將軍であるうちは、幕政を進める上で奴はなくてはならぬ人材なのじや。しかし…」

「しかし…」

「それも後数ヶ月のこと。

家重が將軍就任の暁には彼奴はどうなる、春貞」

吉宗はいたずらっぽい顔をして春貞を睨んだ。

「ふうむ。少なくとも老中の座は追われましような」

春貞も首を傾げながら答えた。

「それは家重が決めることぞ。しかしその程度のこと、乗邑が分からぬはずもないとは思わんか」

「上様。だからこそ遮二無二危ない橋を渡るのではござりますまいか」

「いや、道理が分からぬといつより次期將軍は宗武と思い込んだら己の地位がどうのこうのという事すら気にならなくなつてしまふ男なのじや」

そのとき、

「上様。お支度ができましてございます」

幸江の声がして襖が開けられ、幸江と静香、そして理子が膳を運んで來た。

「おお、これは有り難いが幸江、余は茶漬けと申したぞ」と怪訝な顔をした。

「はい。茶漬けもご用意いたしましたが折角でございますのでよろしかつたらお箸をお付けになつてくださいませ」

急遽富四郎の腕により二の膳までが料理されたのだつた。

満足そうに膳を平らげた吉宗は、

「春貞。雲助の頭に合わせろ。そろそろ戻らなければならぬでな」と破顔した。

「はつ。

上様、その前にひとつだけお許しをいただき儀がござります」

春貞は平伏しながら言つた。

「何なりと申せ、許す」

吉宗の許しを得た春貞は、密命のために御所に立ち寄つた際、関白の勧めで天皇に拝謁した際、一振りの小さ刀を贈られたことを話しながら座した背後から取り出し吉宗の眼前に静かに置いた。

行灯の灯りが揺れ、見事な造りの菊の紋章がきらりと光つた。

「ほう、帝から土産をもらいおつたか春貞。

前代未聞ようう：

よいよい、お主が授かつたものじや、好きなように使え」

吉宗はそう言い切つた。

「ありがたき幸せ」

春貞が平伏すると吉宗は思い出したように、

「そう、土産と言えば、春貞…。

余がお主の労賃と渡した三百両の金を余からの江戸土産だと関白に渡したそうではないか」

とたたみ込んだ。

「はつ。どうにも手ぶらで禁裏に入るのは憚れましたので思いつきにございましたが余計なことでございましたらお詫びいたします」

春貞がそう頭を下げると、

「いや、それでよい。これまた異例のことで春貞…お主しかできぬ芸当よ。そしてな、おかげで余の株も上がつたぞ。

関白からの文にはな、『ことのほか江戸土産は美味でありました』とあつたでな。しかし結局お主をただ働きさせてしもうたな」

と吉宗は機嫌がよかつた。

頃合いも由と春貞がパンパンと両手を叩くと襖が開き、田宮助左衛門、格左衛門、万之助、富三郎そして松谷久四郎が緊張の体で平伏していたが、一番後ろに

は年末の挨拶に立ち寄つたのであろう須田町の岡つ引き岩次郎や読売屋浅太郎の平伏する姿があつた。

「お主が雲助の頭か」

吉宗は松谷久四郎に磊落に声をかけた。

「ははつ」

久四郎は畳に額を付けるようにして平伏すると、

「春貞から体を壊していると聞いたが、大事にせい。

しかしお主らはよき友を持ち幸せぞ。羨ましいわ！」

と語りかけ、続いて、

「ここのは主人は無位無冠だが余の命で京に入り、なんと禁裏で帝に拝謁し土産までもろうてきた驚くべき男ぞ」

笑顔で言い切り、

「春貞、政権移譲後はこれまでより気楽にここへ立ち寄れる。余もお主たちの仲間に入れてくれ」と言つたが春貞が慌てて、

「上様。それらは秘すべきことでは…」

とたたみ込むと、

「よいよい。時期はともあれ余が隠居することはすでに知られておるらしいわ。
それには、京のことは我らが秘密にしたくても帝の近くの者たちから春貞、お主
のことばが噂になつておるそうな」

吉宗は声を上げて笑いながら立ち上がった。

第三章 敵の影

一

延享二年（一七四五年）が明けた。

松谷久四郎も桜の咲く頃までは春貞の屋敷に客分として逗留することになつたため、雲助の頭領としての重責を忘れて日々体の動く範囲で稽古を続けていたし、弥生や笙船と共に茶室で一服の茶を点てるなどしてしばしの幸せを感じてもいた。

また具合がよい時には留吉の操る舟で格左衛門や夏穂らと江戸の町を散策することもあつたし、秋子が仕立てた襦袢を羽織つて大川の川縁を楽しそうに散策するのが日課となつていた。

正月の膳を囲みながら春貞が、

「松谷どの、いかがかな。お口に合いまするか」

と久四郎に声をかけた。

しばらく酒を断つていた久四郎だが新玉の膳には酒が用意されており、美味そうに盃を空けた久四郎は、

「いやはや、驚き感激しております。

これほどの料理、国許でも食したことがございませんでな…。

それに相変わらずよい酒ですなあ。

とにかくこちらのお屋敷におると驚かされる事ばかりじゃ」

と破顔し、隣に座している万之助から酌を受け、頭を下げながら呟いた。
万之助が、

「それは我らとて同じでござる。

上様がお出かけになるだけでも驚愕ですが、この度春貞さまは京で帝にお会いになつたとのこと。

お伴をされた富三郎どのらのお話しどなればにわかに信じられませんな」と言うと、

「さよう。春貞さまのお屋敷には上様が浪人の体で立ち寄られることがあると…以前から米道どのからお聞きしていたわけですが、それがしのような雲助の頭目

にまで声をかけてくださるとは、いやや大きな冥途の土産ができましたわい」と久四郎が破顔すると、

「松谷さま、新玉の祝いに相応しくないお言葉でございますな」

弥生に笑いながら突っ込まれてたじたじになつたりと和気藹々の一時を過ごした。

また春貞がこれまでになく二ヶ月半ほど屋敷を留守にしていたこともあり、正月二日は商家の主人達と共に大勢の来客があつた。

そして昨年末に吉宗が鷹狩りの帰りに立ち寄った際、帰り際に春貞が京で桜町天皇に拝謁したことを示唆したときたまたま居合わせた岩次郎や浅太郎は初耳だったこともあり腰を抜かすほどに驚愕していた。

その岩次郎らがあちらこちらで自分の事のように自慢したのだろう、新年の挨拶に来訪した大店の店主たちの多くがすでに知つていて春貞は、

「帝とお言葉を交わされたのでござりますか」

「帝とはどのようなお方でござりますのか」

「禁裏はお広いのですか」
などなど質問攻めに合っていた。

京にいささか詳しい越後屋の隠居三井高房や夏穂の実父である仏壇仏具店太子堂の隠居長兵衛らも御所の御所たることを知つてゐるからこそ驚愕していた。

「しかし、春貞さまとは長くお付き合いいただいておりますが、本当に驚くことばかりなお方でございますよ」

高房が酒の力もあつて声を挙げると一同ががくがくと頷き当の春貞は照れていった。

正月気分も取れ、二月に入ると松谷久四郎の体力がかなり持ち直したかに思えた。

日々春江館で格左衛門や万之助らと木刀を交えるまでになつていた。
しかし小川笙船は春貞と二人きりになつた際、

「春さんや、伝えておくが決して松谷さんの病が治つたわけではない。

薬も多少は効いてゐるに違ひないしなによりも己が春さんたちと剣を交えたいと
いう強い意志を持ち、酒も僅かしか飲まなくなつたことも良き方に向かつて
いるが、あの元気は一時的だと思いなされ。

病氣というものは不思議なものでな、例えは悪いが命の尽きる間際にどうしたこ

とか元気を取り戻すように思える時期があるものなのじゃ。

したがつて松谷どのも後半年ほどすれば残念だがお迎えがくるやも知れんでな」と耳打ちしていた。

春貞が無言で領くと笙船は、

「したがつてな春さんや。ここはなるべく松谷さんのやりたいことをやらせてあげなされ」

ため息をつきながら笙船は少し腰を曲げて後ろ手を組みつつ、診療所へ入つていったが春貞はその背に頭を下げた。

春貞が春江館へ入ると米道格左衛門と堀田万之助が組み手を、横手富三郎は夏穂と、そして理子が留吉の棒術と相対していたが松谷久四郎は一人木刀を手に右左甲段からの袈裟切りの構えを続けていた。

春貞の姿を認めると一同は形を解き、頭を下げたが、「そのまま続けてくれ」

の声にそれぞれが今まで通りの動きを始めた。

春貞は久四郎に近づき、

「松谷どの。今日は体の動きもよきようでござりますな。

一手それがしと木刀で相対してみませぬか」

と声をかけると久四郎の表情がぱあつと明るくなつた。

「ありがとうございます。

まだまだ体も元どおりではございませぬし、もともと春貞さまはそれがしなどが敵うお方ではございませぬが一手でもお相手願えるなら嬉しゆうござる」

と頭を下げた。

「タイ捨流拝見いたす」

春貞も木刀を手にして道場の中央に立ち神棚に一例すると久四郎もそれに倣つた。

すでにピリピリした空気を察しそれまで稽古を続けていた格左衛門らは皆壁際に座して二人の成り行きを見守つていた。

二人は相対して頭を下げた。

タイ捨流剣術は流祖丸目蔵人佐長恵が戦国時代を生き抜き、実践の中から編み出した剣法で、ほとんどが右左甲段からの袈裟切りである。

また飛び跳ねて切る、逆手斬り、足蹴りなども使い、関節技までも使う独特な流儀であった。

向かい合つた春貞は下段に構えて右肩を引いた。

「ほう、^{がっし}合撃か」

と格左衛門は呟いた。

久四郎は右甲段構のまま「まいる」と裂帛の気合いを発して走るように春貞に迫り袈裟懸けに切り裂いた。

春貞も珍しく木刀で防ぎつつ久四郎の脇を一陣の風のように躱した刹那、身を翻した久四郎の片足が春貞の足を蹴ったかに思えた。

富三郎が思わず「あつ」と声を出したが体制を崩されたかに見えた春貞は木刀を床に刺すように立てた反動で飛び上がった。

それを追うように久四郎の木刀が執拗に追い迫つた瞬間、春貞が飛びながら叩いた久四郎の木刀が二つに折れた…。

しばし呆然と立ち尽くしていた久四郎は我に返り、「ま、まいりました」

と折られた木刀を手にしたまま床に崩れるように座した。

「松谷どの。タイ捨流の奥義、しかと拝見つかまつた。

今日の動きと気迫、春貞嬉しゅうござる」

と言いながら木刀を左手に持ち替え、右手を久四郎に差し出すと破顔した久四郎はその右手を己の右手で握りしめて立ち上がった。

「春貞さま、ありがとうございました。

しかし、木刀を空で折られるとはそれがし思いもしなかつた結果。

なんと申してよろしいか：春貞さまは新陰流を超越なさつておりますな」荒い息を整えるような話し方で久四郎は満足そうに頭を下げた。

万之助も富三郎も本心は一手久四郎と手合わせしたいと思つていたが、いまの立ち会いで久四郎は力を出し尽くし、続けての立ち会いは無理だろうと声をかけるのを躊躇つていた。

そのとき、夏穂が遠慮の無い声を上げた。

「松谷さま、一手ご指南を」と…。

「これこれ夏穂、松谷どのはお疲れであろう。明日にでも願いなされ

夫の格左衛門が気遣つたが、

「ほう、これは嬉しい。

是非お願ひいたす

と久四郎は新しい木刀に替え進んで道場中央に立つた。

夏穂は臆することもなくこれまた木刀を左手に持ち久四郎に頭を下げた。

「夏穂も姿は相変わらず京人形のようだが腕はもとより立派になつたものよなあ

格左」

春貞が隣の格左衛門に呟くと、

「妻も今年で三十五歳になりますからなあ」と感慨深そうに答えた。

「いざ」

「おう」

声を上げた二人は二間半ほどの間合いを取つた。

久四郎は先ほど春貞との立ち会いとは違ひ脇構え、夏穂は青眼^{シキ}。

咄嗟に上段に回した久四郎が踏み込みながら袈裟に斬つて出た。その切つ先を木刀で受けず、自らも踏み込んだ夏穂は寸毫右に躱しながら回し斬りつつそれに終わらず得意の片手突きだ。

「うつ」

僅かに鬚をかすめた切つ先を体を回しながら躰した久四郎は一瞬背を見せた。

夏穂は伸ばした切つ先を追うように体を跳躍させて二段突きに迫った刹那、久四郎の片足が呻るように回し蹴りし夏穂の額をかすめた。

「それまで！」

春貞の声で木刀を收め床に座した二人は笑顔で頭を下げ合つた。

「ありがとうございました。しかし体を反転させながらの蹴りなどこれまで経験したことがございませんでした。

手加減をしていただきなければ額を強打されていたはずです。恐ろしい技でござりますね」

夏穂が息も切らさずに言うと、

「いや、夏穂さまの強さは承知の上でしたが、あの片手突き、真剣であれば切り裂かれていたかと思います。あの敏捷さは驚異でございますぞ」と褒め合つたが久四郎は無理をしたのか少々咳き込んでいた。

まだまだ朝晩は冷え込むことが多い三月初旬の夕刻、佐吉が慌てた様子で飛び込んで来た。

「どうした」

昨年徳川家重より授かつた名刀、愛染国俊の手入れをしていた春貞は抜き身を鞘に収めながら問うた。

「春貞さま、今夜未明に浪人者二十数人、いや三十人近いかと思いますが屋敷に襲撃をかけてくる気配です」

とまくし立てた。

ちょうど道場から戻ってきた松谷久四郎と米道格左衛門、堀田万之助、横手富三郎らが氣色ばつた。

「何ごとでござるか」

久四郎が問うと、

「どうやら老中筆頭さまの最後つ屁のようでござります」

佐吉の言いように思わず春貞は苦笑したが、

「まだ次期将軍は発表されておらんだろう。なぜ今なのだ」

と問うた。

「どうやら次期将軍は家重さまと上様が心づもりなさつたことを察したものと思われますが、最後の巻き返しの一手と思つたようです」

「上様が前に申されたとおり、奴のクソ眞面目の性格で思い込んだら一途となりやあ、確かに何をしでかすかは分からんな。」

佐吉、幸江や静香、夏穂らにその旨を伝えてくれ。

今夜は寝ずの番で賊を迎撃つとな。

それから佐吉、念のためだ鉄砲や火矢の攻撃もありうると考えて手を打つてくれ

と命じた。

「まったく俺たちを殺したところで将軍が代わるわけではない。猪突猛進というやつかも知れんが相変わらず危ねえ男よなあ」

「春貞さまを亡き者にすれば上様のお考えが変わると思ってるのでしようかな」

格左衛門が呆れたように言い捨てた。

「かも知れねえな…。」

格左。お前が皆の指揮をとつてくれ。

まあ今更襲撃だと慌てるこたあねえだろうがな」

と春貞が言うと久四郎が、

「春貞さま、是非ともそれがしもその戦いに加えていただきたい」と両手を畳について願つた。

「しかし、松谷どのは大事な客分…」

春貞が言い淀むと、

「一宿一飯でも恩義を受ければ助太刀させていただくのが道理。

かつて雲助宿に泊まつていただいた米道どのや夏穂さまも我らが野武士たちに襲われた際には手助けいただきましたぞ」

久四郎は春貞を睨みつけるよう続けた。

「それに我が命、粗末にするつもりはござらぬがご承知の仕儀。

万一遅れを取つたとしても誰を恨むものでもございません。なによりも少しでも春貞さまらのお役に立てたとするならこれ以上の喜びはござらぬ。

何卒ご承諾を

と迫つた。

しばし無言でいた春貞は、ふと先ほど笙船の「したがつてな春さんや。ここはなるべく松谷さんのやりたいことをやらせてあげなされ」という言葉が頭をよぎつた。

「分かり申した。

松谷どの、我らにお主の命、預からせていただきましようぞ」

と破顔しながら応じると久四郎は、

「ありがたき幸せ

と平伏した。

その日の未明、佐吉がもたらした情報通り大勢の侍達が屋敷の門前に集まる気配があつた。しかしきなりであればともかく春貞たちには十分攻撃に備える時間があつたし日ごろから準備対策を怠つていなかつたことから結果は目に見えていた。

使用人や小川笙船、弥生や友子をはじめ非戦闘員の子供たちは早々に離れの一室に匿われ、田宮助左衛門と留吉、それに幸江と理子が刀を携え万全の警戒をして

いた。

一方母屋では春貞をはじめ、格左衛門、万之助、富三郎、夏穂および松谷久四郎が、屋根上には佐吉と静香が亡き弥三郎直伝の飛び道具を備えて待ち構えていた。

夜の九つになろうとするとき「うお！」という怒号が飛び交う中、開き門を蹴破つたり乗り越えた大勢の男たちが抜き身を下げ母屋を目指して駆けてきた。

刹那母屋やその屋根からいくつもの龜灯がんどうが照らされ、その眩い明かりに賊たちは目が眩んだ中、静香と佐吉が放った弩から幾筋もの矢が放たれた。

「ぎゃあ」

「うわあああ

先頭を切つて飛び込んで来た十人ばかりが折り重なるように倒れ、転げ回つた。さらに倒れた者たちを踏み越えるように迫ってきた賊たちを迎え撃つたのは横手富三郎と松谷久四郎だ。

久四郎は襷掛けし、額には手拭いを幾重にも織り込んだ鉢巻きをキリリと締め、覚悟のほどを示していた。

事実久四郎の働きは後々まで春貞たちに語り継がれるほど凄まじかつた。屋根から見ていた静香や佐吉が驚愕するほどの剣さばきだつた。

それは向かつてくる多くの敵に抜刀、突柄、足蹴、逆握そして相手の刀を奪い取る奪刀といった伝統的なタイ捨流剣術の技で迎え撃ち、見事な戦いであつた。

「ガキーン」

「ガシャツ」

刀と刀が打ち据えられる音が響くと久四郎と富三郎の回りに血の海ができた。

一方、富三郎は尾張および名古屋への旅の途中、春貞から授かつた郷義弘作「五月雨江」と伝えられる名刀で奮戦していた。

また二人の後ろには米道格左衛門と堀田万之助、そして夏穂が賊を母屋に一人とて入れない覚悟で立ちはだかっていたが、久四郎と富三郎の間をすり抜け駆けてきた者たちは格左衛門らに一刀のもとに倒された。

四半時もすると賊の中で息のある者は四人しかいなかつた。また夜半ではあつたものの戦いが一段落したことを確かめた留吉と佐吉が早々舟を使い南町奉行所へと急いだ。

一時も早く死体を片付けてほしかつたからだが、それでも伊丹鉄太郎をはじめ奉

行所の捕り手たちが到着し片付けが終わる頃にはすでに日の出の時刻になつていた。

「春さん。こんなときにしか来られないのは申し訳ないが、それにしてもここはよくもまあ狙われる屋敷よなあ」

鉄太郎は勝手知つたる居間に上がり込んで呟いた。

「おいおい、その物言ひはいかにも俺たちが悪事を働いているように聞こえるぜ」

友の氣安さから春貞も口を尖らせると鉄太郎は、

「いや、そんなつもりじゃあねえが春さん。今度はなにをしたんだい」

と破顔しながら問うた。

鉄太郎らが引き上げると明るくなつた縁側で久四郎と富三郎が手鏡に向かつていった。

刀どうしが打ち合うと時に刃こぼれした細かな鉄片が額などに食い込むためにそれを針などを使い取り去つていたのだ。

それだけ今回久四郎らの戦いは激しかつたことが伺えた。

「松谷どの。おかげで助かり申した。

お体の方はいかがでござる」

春貞は礼と共に久四郎の体を気にして声をかけたが、久四郎は使命を果たした喜びにまだ上氣しているように思えたが、

「いやはや、楽しかつたと申せば大いに不謹慎でござるが、嬉しいことにいざとなると体が動いたことに己が驚いております」と破顔した。

三

そういうえば同じく三月、勝手掛老中の松平乗邑がこれまでの功績を認められて一萬石加増されたという情報が佐吉からもたらされた。

「ほう、先に上様がそのようなことを示唆されていたが本当だつたか」

春貞が少々驚いたように呴くと、

「我らとしてはどうにも納得いたしかねますな」

と格左衛門が苦虫を潰したような顔をした。

「明らかにこれまでの功績に対しての褒美といつた主旨のようでございます」

報告した佐吉が念を押すと万之助は、

「先の襲撃で生き残り捕縛された者たちはその後舌を噛み切り自害して果てたと聞きましたな。」

これだけ命を粗末にした者に褒美とはどうにも納得いきませぬぞ」と憤慨すると富三郎も春貞に向かい、

「お上の考えておられることはまったく分かりませぬな」と声を荒立てた。

「まあ、彼奴が一万石増えようと二万石増えようとも我らには何の風も吹いてはこぬ。」

それより彼奴が満足して我らへの敵対心を忘れてくれればよいがな。

ただし万之助が言つたようにこれまで多くの命を失わせておることを忘れてはならぬ。この罪は重いと知らなければならぬし酬いを受けなければならぬ」

春貞はそう口にしながら天井を睨んだ。

三月半ばになると向島一帯も桜を見に出向く人たちが増え始めた。

向島は現在でいう東京都墨田区北西部、隅田川沿いの地区を指し、東向島とあわせて墨東とか隅田堤あるいは葛西堤ともいわれ、後には花街で賑わうものの、この時代、春貞の屋敷付近はまだまだ普段は人通りが少なく閑散としていた。しかしこれでも桜の開花には早い十八日、いきなり徳川家重が来訪した。

大岡忠光の他に田沼意次も一緒だった。

「家重さま。この御身大切な時期にこのような所にお出ましになられてよろしいのでござましようか」

客間の床の間を背に座した家重に春貞が心配そうに聞くと、

（心配無用じや。あの警固陣の他にも上様が影護衛をつけて下さったからな）
と破顔した。

忠光は改まって、

「春貞どの。発表はまだ四五ヶ月先になろうかと存じますが、おかげを持ちまして家重さまは第九代征夷大将軍にご就任なられる日処がつきましてござります」
春貞に向かつて頭を下げた。

慌てた春貞は、

「お待ちくださいませ大岡さま。それがし、なにをした訳ではございません」
これすべて上様のご高察の賜物と存じます」と言い切つた。

「いや、長幼の序と申し立ててくださつたにせよそれは当然家重さまを蔑ろにする輩を遠ざけるお言葉。殿はことのほかお喜びでござる」

忠光が言うと家重もがくがくと頷いた。

「そう…あ。のおとつ…をしよう…つかい…る」

家重は大岡の隣に座した田沼意次を紹介し、近々將軍の身辺警護の責任者である小姓組番頭に取り立てる予定だと言つた。

「田沼意次でございます。若輩者でございますのでお引き回しの程を願います」
意次は丁寧に春貞に向かつて平伏した。

「こちらこそ宜しゆうお願ひ申します。

そういえば以前城中でご挨拶いただきましたな」

と春貞が言うと意次は覚えてくれていたかと嬉しそうな表情をして頷いた。

意次はこのとき二十六歳の若さだったが、後に側用人そして老中と出世し田沼時代と呼ばれる権勢を握るに至る。

ふと真顔になつた家重は、

（忠光からも聞いたが、屋敷が襲撃に遭つたとか。まことか）

と問うた。

「ははっ。ご心配をいただき恐縮至極に存じます。

約三十人ほどの浪人者と思われる輩に襲われましてござります」

春貞が平伏しながら当日の様子を概略伝えると家重は顔を真つ赤にして怒りを表していた。

大岡忠光が、

「春貞どの、失礼ながら浪人たちの雇い主ははつきりしておるのでしようかな」

と問うた。

「いや、ほんとを斬り捨てましたので賊たちに問いただすことは出来なかつたため確証はございません。また息のある者は奉行所に引き渡しましたが、直接の依頼主の名を承知とも思えませぬ。

しかし…」

「しかし…」

「はい。奴らは物取りとは到底思えませぬし我らとてそうそう敵ばかりではござ

らぬ。

この時期を考えますと尾張への旅の途中と同様あの方の差し金としか思い当たりませぬ」

春貞は首謀者は老中筆頭、松平乗邑であることを示唆しつつも、

「しかし、我らを倒したところで上様のお考えが変わるとは思いませんし、実に迷惑千万：」

と言い捨てた。

しかし家重は、

（お主らが身をもつて余を守ってくれたことになる。礼を申す）

と頭を下げ春貞を慌てさせた。

家重が上機嫌で帰つた丁度その夜、飛脚が雲助宿の留守を預かる佐川太一の文を運んで来た。無論、松谷久四郎宛の文である。

一読した久四郎が一瞬寂しそうな顔をしながら文を春貞に渡した。

そこには雲助宿の近況報告と共に月末に予定通り権蔵ら駕籠舁き四人を迎えて使わすとの内容だつた。

「松谷どの。我らはまだまだ一緒にいていただくのに何の不都合もございません。いま暫くお戻りになるのを伸ばされたらいかがか」

春貞は久四郎の気持ちを忖度して言うと、

「そうしたいのは山々なれど、やはりそれがしは雲助の親玉。命のある内にその役目を放棄しては雲助たちに申し訳が立ち申さん。

それに、おかげを持ちましてそれがしの夢は叶いました。

春貞さまらと剣を交えることができただけでなく、実戦も体験できました。これ以上長逗留させていただくと帰りたくなくなりますでな。
予定通り今月末に戻ることにいたしまする」

久四郎がきっぱりと言いたつた。

「承知いたした。それでは後半月、より楽しく過ごしましようぞ」

と春貞が言うと格左衛門や万之助らも笑顔で頷き、久四郎も破顔して応じた。
久四郎自身、己の体のことは口に出さなかつたが、定期的に診断を続いている笙船に言わせると胃の腑の腫瘍は確実に進行しているとのことだつたし、木刀を持つたその眼光も二ヶ月前と比べると些か力がなくなつていた。

そしてあつと言う間に別れの日がやつて來た。

久四郎は居間で春貞や幸江、弥生や格左衛門らの前に両手を突いて頭を下げ、「春貞さまからお誘いをいただき、この久四郎：生涯を終える間際に思いもしないよき思い出を多々積み重ねることができ申した。

中でも上様にお目にかかるだけではなくお声をかけてもいたきました。
これ以上望むのは不遜でございましょう」

久四郎は言葉を切った後、

「春貞さま、ご一同さま。

この山猿を暖かくお迎えいたきましたこと、皆様と過ごした三ヶ月あまりの思い出を咀嚼しながら箱根で生涯を終える所存です。
ありがとうございました。このとおりでござる」

松谷久四郎が平伏すると畳に一粒の涙が落ちた。

春貞や幸江、弥生や友子、そして格左衛門や夏穂らも皆目を赤くしていた。
この日の別れが生涯の別れであることを皆知っていたからだ。

格左衛門が春貞の意を汲み用意していた金子五十両を涙ながらに無言で手渡すと久四郎も無言で頭を下げる受け取った。そして、権蔵らが運んで来た駕籠に刀を

抱きながらその身を滑らすように乗り込んだ久四郎は、

「ゞ一同さま、さらばでござる」

と振り返ることもなく留吉の用意した舟のある船着き場へと進んだ。

弥生が思わず啜り泣きしながら両手を胸の前で合わせた。

四

松谷久四郎が去ると寂しい思いをする者が多かつたが、春貞はそんな感慨に耽る暇も無いほど次々と新しいことに直面していた。

翌四月に尾張藩第八代藩主、徳川宗勝が参勤のため江戸にやつてきたが、登城し吉宗に挨拶の後、いそいそと春貞の屋敷の門前に大名駕籠を乗り付けた。

「兄様。相変わらず慌ただしくて申し訳ありませんぬ。

今日は急ぎご挨拶だけで戻りますでな、お構いなく」

と言いながら、昨年春貞に授けたもののその後に京へ出向くことを知り、荷物に

なるだろうからと来年の参勤時に持参する約束になつてゐた兼元作の名刀二振りを春貞の前に差し出した。

「これはこれは殿にお使い立てさせて申し訳ありますぬ」

春貞が平伏すると宗勝は立ち上がりつて春貞の眼前に座り直し、「兄様。漏れ伺つたところによれば京へは物見遊山ではなかつたようでござりますな」

といたずらつ子のような表情で問うた。

「お耳に入りましたか」

春貞も苦笑いしながら答えると、

「はい。上様の密命を持つて禁裏にあがり、帝に拝謁されたとか。

兄様のこと、大概なことには驚きませぬが、これまた前代未聞なことでございましたな」

さすがに御三家筆頭格尾張藩藩主、情報は的確に集めているようだつた。

「密命故、殿にも公言できませでしたが実に肩の張るお役目でございました」

春貞は正直に肯定した。

「いや、しかし正直最初に耳にしたとき、いくら兄様でもそれは誤報であろうと

思いました。

ご承知のように尾張は古から朝廷とはよい関係を結んでおりますが、余…それがしも含め帝に拝謁した藩主などおりませぬからのう。

さすがに兄様だとお噂しております

宗勝は嫌みで無く本心から自分の事のように喜んでいるように思えた。

「この時期、上様の命で御所へとなれば密命がどのようなもののかは察しがつきますが、確かに大変なお役目でございましたな」

幸江が運んで来た茶を美味そうに口にしながら宗勝は、

「噂によれば、それがしがこの江戸にいる内に將軍移譲の儀があるのでないかともつぱらです。

城の中もいろいろと忙しくまた慌ただしくなりますがまた寄らせていただきます」

宗勝はそういういつつ春貞らに頭を下げて帰つて行つた。

春貞は門前まで宗勝を見送った後、格左衛門と万之助を居間に呼んだ。

「春さん、いかがされましたか」

格左衛門と万之助は宗勝が帰つた直後だけに何ごとかと春貞の前に座した。

春貞は笑顔で二振りの刀をそれぞれ見立てた上で格左衛門と万之助の前に差しだした。

「……」

「なにを仏頂面してるんだ格左。

これはな、宗勝の殿から尾張滞在の土産として授かつた二振りなのだ。しかし俺が名刀を何振りも持つていたところで床の間の飾りにしかならねえ。
でな、お主たちに使つて貰おうと呼んだわけよ」

春貞が破顔して言うと、

「春貞さま、拝見してよろしゅうござりますか
刀の目利きには定評がある万之助が問うた。

「勿論だ。目釘もはずしてみろ」

春貞の許しが出たので万之助と格左衛門はそれぞれの前に置かれた一振りを丁寧に抜きつつ、明かりにかざしながら手際よく目釘を外した。

「ごくつ」

と万之助が生唾を飲み込む音が聞こえた。

「こ、これは…」

と格左衛門がため息をつくと、

「鍛えは板目肌が流れ肌立ち、鎬地柾目…。

棟の重ねが薄く鎬筋高い造り込みで見事な三本杉の焼刃…。

これはまごう事なき孫六兼元の一振りではございませぬか

万之助が感嘆の声を上げた。

「うむ。殿もそう申されておつた。

昨年末、郷義弘作の一振りを富三郎に下げ渡したとき、先輩格のお主らは嫌な顔も見せず富三郎を祝ってくれた。

そのときに話そうと思つていたが、現物がねえのに申し渡すのも空手形みてえで嫌なのでこの日まで待つてもらつたというわけだ。

留吉の言い草ではねえが、屋敷内の四天王に使つてもらえば刀も満足だろうぜ

春貞が諭すようにいうと格左衛門と万之助は感極まつて春貞の前に両手を突いた。

格左衛門が、

「春さん、俺たちが逆立ちしても兼元の一振りなど一生手にすることなどできようもないことだから夢のようだ。

この一振りに恥ずかしくないよう努める」

万之助と頷きあつて決意を新たにした。

五

その同じ日、駿河町に静香と秋子の姿があつた。呉服商越後屋に向かうためだつたが留吉が舟を操り、そのまま愛用の六尺棒を担いで荷物持ち兼護衛として付き添つていた。

四月は更衣の季節だつたが不足の生地などを求めに足を向けたのだつた。そういうえば秋子は越後屋付近を歩くのは本当に久しぶりだつた。

「秋子さまは越後屋さんとはご縁がありだつたと伺いましたが」
静香が問うと、

「はい。しかしご縁といつても時折縫い物のお仕事を回していただいていたわけで、こうして仕立てのための買い物などしたことはございません。

だたし婚礼衣装を若奥さまに見立てていただきました際に一度奥座敷にお招きいただきました

と笑つたそして、

「静香さまは何度か来られましたか」

の問には、

「若奥さまに連れられて幾度か参りました」

そんなたわいもない話をしていると御店の前に着いた。

暖簾を押すと奥の帳場にたまたま三井高房が大番頭にか、指示を出していたところのようで秋子たちの姿を見つけて声を上げた。

「これはこれは秋子さまと静香さまではございませぬか。おお、留吉さんも。どうぞこちらへ」

江戸一の分限者が手を取るように迎入れたので広い御店に腰掛けていた十数人の客たちは何ごとかと注視した。
「これは恐れ入ります。

更衣の反物が足りなくなりましたので数反いただきにまいりましただけでござります。

ご隠居さまにお手数をおかけするのは畏れ多いことでございますのでご放念下さい

秋子が恐縮して願うと高房は、

「とんでもないことでございます。

春貞さまのお屋敷の方々は手前にとつて特別のお方たちでござりますでな」

そのあからさまに言い放った言葉に客たちが振り向き、

（ああ、向島の松平春貞さまのお屋敷の者たちのようだ）

と納得している様に秋子たちは顔を赤らめた。

秋子と静香が反物を選んでいると高房は留吉に茶を出しつつ、

「留吉さん。実は以前お作りいただいた義歯ですがここのこところ少々違和感がございましてな。よろしかつたら後で診ていただけませぬか」と願つた。

「おやすい御用でござりますよ。

ただし本日は道具類を持参しておりませんのでご調整できることかどうか分かり

ませんが、まずは拝見させていただけますか」と言うと高房は、

「それはありがたい。いま外して洗つてまいりますので…。で、店先ではなんですからご面倒でもこちらへ」と奥座敷に留吉を案内した。

高房が綺麗に洗い乾かした義歯を手に戻つてきた。それを受け取った留吉は、「ご隠居さま。どの辺がお具合わるいのでしようか」と聞き、

「なるほど。

ご承知のように手前は医師ではございませんが、失礼ながら念のためお口の中を拝見できませんか」

そんな話をしていると店の方から怒号が聞こえてきた。

留吉は義歯をその場に置き、店頭に急ぐと見るからに酒に酔つた体の赤い顔した若い侍が二人、手代に因縁をつけていた。

「金は後から持つてくると申したではないか。武士の言葉を信用せんのか、無礼者」

「いや、一見さまは現金売りが当店の決まり事でございますのでご勘弁を願います」

手代も一応は頭を下げてことを収めようとしていた。

「五月蠅い。町人の分際で偉そうに申すな。

無礼打ちしてくれるわ」

と刀に手を掛けたとき、

「侍なら侍らしくなさつたらいかがですか」

静香が小袖のままで手代の前に立ちふさがった。

「うぬつ。女の身でこぎかしい奴め。

どけつ、どかぬと一緒に斬り捨てるぞ」

と刀を抜いて片手で振りかぶった。

「嗚呼」

店内に悲鳴が響いた瞬間反動も無く静香がふわりと飛び上がり、男の顔を蹴り上げ、続いて抜刀したもうひとりの男の首にいつの間にか取りだしたのか分銅が付いた細紐が絡まっていた。

「ぐうつ…ま、まつてくれ」

男が喉から絞り出すような声を出し、腰碎けの姿勢で両手を前に突きだした。

「待てばどうなさるおつもりか」

静香が言つたとき顔を蹴られた男が立ち上がつて静香に斬りかかつた。

「静香さん！」

思わず秋子が叫んだほど静香は刃の下にいたが刀は確かに静香の肩口に中つたかに見えたが、

「ガシャツ」

と音がした刹那、静香の手刀で男が吹つ飛んでいた。

同時に留吉の六尺棒が細紐に繫がつてゐる男の鳩尾を突き気絶させていた。

「静香さま。だ、大事ございませんか」

留吉が心配して声を出したが、静香は笑顔で小袖を少し巻き上げると小袖の下には細い金属の糸で縫つた鎖帷子が着込まれていた。

「す、凄い」

思わず呻つた留吉に、

「屋敷外では鎖帷子を着けよとの弥三郎先生のお教えでございますので」

静香はしつと答えたが、誰が呼んだのかそのとき南町奉行所の同心米倉小太郎

と配下の捕り手たちが飛び込んで来た。

「こ、これは松平春貞さまのご家族の方たちではございませぬか」

米倉小太郎は春貞の親友伊丹鉄太郎の同輩だつたから秋子や静香そして留吉たちをよく知つていた。

ために秋子たちは特別尋問もされず二人の侍は引き立てられていつた。

一部始終を恐怖の体で見ていた客たちは静香たちの立ち振る舞いに感嘆し思わず手を叩く者もいた。

「ありがとうございました静香さま。

滅多にあのような狼藉者はまいりませぬが、大店を狙い無理難題を吹っ掛けて小金をせびるお侍がおるのでございますよ」

と三井高房は静香たちに頭を下げた。

「お騒がせいたしました」

「義歯の件は道具を用意しました一両日中に参ります」

秋子、留吉の言に、

「ありがとうございました。春貞さま、幸江さまに宜しくお伝え下さいませ」

高房らの声に送られ、静香と秋子が選んだ反物を風呂敷包みに包み込み、留吉が

それを担いだ。

「留吉さん、重いものを申し訳ありませんね」

秋子が気遣うと、

「なあに、舟に乗るまでのこと。

それにね秋子さま、お聞きになつたことがあるやも知れませぬが昔昔、手前は二千両箱を盗む片棒をかついだことがありますてね、それを担ぐことに比べたら軽いものでさあ」

留吉の物言いに秋子と静香は声を出して笑つた。

「しかし静香さま。先ほどは驚きましたよ鎖帷子とは」

と留吉が話しを蒸し返すと、

「忘れてください留吉さん。弥三郎先生のお言葉を忠実に守つてあるだけですか
ら。それに本来なら刃を除け切れなかつたのはまだまだ修行が足りない証しへござ
ります。また帷子など、隠してこそ意味のあるものでございましよう」

と言うと留吉は、

「確かに、確かに」

と破顔した。

和氣藹々とした買い物が終わり、留吉の操る舟が大川を滑つて向島の船着き場に着いた。

三人が屋敷の門前まで近づくと左右から四・五人の浪人らしき男たちが近づき、「こここの屋敷の者か」と一人がダミ声を上げた。

留吉が、

「さようでございますが、どなたさまで

と応じると、

「死んで貰う」

と叫びながらいきなり抜き打つた。

一昔前の留吉なら確実に真つ二つになつていたことだろうが、今では日々棒術の稽古を怠らずに励んでいたこともあり寸毫飛び下がつて切つ先を避けたが担いでいた風呂敷包みの一端が着られて反物が地に落ちた。

とのとき、

「無礼者」

静香の声が上がつたと思つたら囮みの輪を縮めてきた五人の浪人者の腕や顔に鉄

片がめり込んだ。

「ぎやあああ

「うわああ」

悲鳴が上がり、その声を耳にした横手富三郎が飛び出でた。

「おお、皆さんお怪我はございませぬか」

そう言いつつ、地べたを転げ回っている男たちを見て、

「怪我はこいつらの方ですな」

と笑いつつ、

「留吉さん、手足を縛つて道場に連れ込みましょうぞ」

と声を上げた。

四半時後、およしらに簡単な傷の手当てをされながらも手足を拘束された五人は道場床に転がされ、その周りを春貞、格左衛門、万之助そして富三郎らに囲まれていた。

格左衛門の膝の上にはどう言うわけか大きな徳利が乗せられていたが、

「春さん、まずは一献」

場違いな物言いで格左衛門は春貞が差しだした盃に酒をみなみと注ぎ、万之助

や富三郎もそれに習つた。

春貞がグツとひと飲みすると転がされている男たちの中の二人がゴクツと喉を鳴らした。

「美味しい。よき酒ですなあ」

富三郎が磊落に呟くと春貞は五人に向かい、

「正直に俺たちの間に答えればこのまま酒を飲ませて放免してやろう。しかしそうでないなら八丁堀の牢で辛い目に合うぜ」と凄んだ。

「で、誰に頼まれた」

春貞が静かに問うと五人は互いに顔を見合させていたが、一人が意を決したように額の傷を気にしながら口を開いた。

どうやらその男が五人の内の親分格の様子だつた。

それによると山谷堀端の一杯飲み屋で一人で飲み引き上げようと歩き始めたとき頭巾をした身なりの良い武家に声をかけられたという。

ちなみにこの時代には新吉原遊郭への水上路として、隅田川から遊郭入口の大門近くまで猪牙舟が遊客を乗せて行き来し、吉原通いを「山谷通い」とも言うほど

知られていた。そして界隈には船宿や料理屋などが建ち並び、「堀」と言えば山谷堀を指すくらいに有名な場所だつた。

「それがしは一人で飲んでいたのじやがそやつは、頼みたいことがあるが向こうの料理屋で飲み直しをせぬかと誘つてきまして‥」

懷が寂しく飲み足りなかつたこともあります話しだけでも聴いてみようと後について小さげいな店の二階に座したのだという。

「その武家とは知り合ひだつたのかい」

春貞の間に男は首を横に振つたが、

「話したことは一度もないが、茶屋で覆面を取つたとき思いだした。

十五年ほど前にとある道場で見かけた顔だつた‥。ただし向こうは俺の名を知つていたが‥」

「なるほど。相手はお主だと知つて声をかけたのだろうな」

「そうだと思う」

「先を聞こう」

その武家は五両を眼前に差しだし、これでとある屋敷のやつらに怪我でもさせて欲しいと言つた。

ただし腕の立つ奴らだから一人より人数は多い方がよいとも言つたらしい。
なぜこのような辻斬りまがいのことをするのかと問うたが、詳しい事は話せぬが
御政道を正しく押し進めるには邪魔な悪党たちだと聞かされたという。

「おう、我らは悪党か」

格左衛門が大声を上げたが春貞が、

「格左、まずは聞け」と制した。

「いまのそれがしに五両は大金。しかしそれ以上に魅力的な条件を出してきたので乗つた次第」

「ふむ。それは事が成就すれば仕官の道が開けると言われたか」

春貞の言に男は無言で額き唇を咬んだ。

「ここからが俺たちにとつて大切な事だが、その武家は誰だかお主存じているのか」

春貞の尋問は確信に入った。

「いや、どこの誰かは知らぬ。しかし…」

「うむ。先にも言つたが道場で他の者と話をしている中で仕えている殿さまが老中首座になるかも知れぬと呴いた言を覚えておる。また下総国佐倉藩という話しも耳に入つた」

「なにつ」

格左衛門がまたいきり立つたが隣の万之助に止められた。

「ほう。その話しさはいつ頃の話しだ」

春貞の問に、

「いや、だから十五年ほど前だと思う。ただしその時期俺はお役目を失敗してな、とある藩を出なければならなくなつたので羨ましく良く覚えておるのだ」すつくと立ち上がつた春貞は、

「お主、名は何といふ」

と聞くと男は「柴田長二郎」と即座に名乗つた。

「よし、格左。皆の縄を解いてやれ」

「はつ」

格左衛門らにより五人の手足から縄が外されたが受けた傷もあり即逃げることもできなかつた。

春貞は懐から小判を一枚男に握らせ、

「これは治療代だ。それにな、その酒は約束通り持つて行つてよいぞ」

と優しく言つた後、

「そうそう。俺は松平春貞だ。

幕臣ではないが先の武家が言つたという御政道を害する悪党かどうか己たちで調べてみよ。

それには、余計な事かも知れぬがその武家には今後近づかない方が身のためぞ。もし我らを傷つけ奴らの思うような結果をお主たちが持ち帰つたとしても仕官などあるはずもなく、反対に闇に葬られるのが関の山よ。

分かつたか。

分かつたら行け

春貞の言葉を受け、小判を握り徳利を持った五人は這々の体で逃げていった。

「春さん、いまの話しだが老中首座とか下総国佐倉藩だが皆あの松平乗邑を示唆しているではないか」

格左衛門が言うと万之助も、

「今の男が虚言を吐く意味もありませぬから本当のことでしょうな」と腕を組んだ。

「となればやはり依頼主は松平乗邑ということになりますか。

過日の襲撃が最後かと思つておりましたがな…」

富三郎が呻つた。

「だろうな。しかし、今の話しだけで奴の屋敷に乗り込むわけにもいくまいよ。俺たちの敵は影のように捉えどころがねえ。

もし、話しの中の武家に行き着いたとしても老中そのものまでは手が届かぬ…。

厄介なことよなあ

春貞たちは春江館を後にして母屋へと向かつた。

六

夏らしい日射しが照りつけるようになつた七月、向島診療所は朝から混雑してい

た。

今年から小川笙船は診療所の常勤を外れることになり非常勤となつた。理由は言うまでも無く笙船が今年七三歳になつたことによる。気力は十分だし年齢にしては風邪一つひかずに元氣だが疲れやすく体がなかなか言うことを聞かなくなつたからだ。

とはいえ笙船を信頼して遠方からやつてくる患者もいたし、笙船自身も気分が良いときには以前と同じく一日中診療所に詰めている日もあつた。

「先生、お疲れでしょう。そろそろ揚がられたらいかがでしょうか」
およしがひとつき患者が途切れた八つ、笙船に声をかけた。
「ふむ。もうこんな時刻か。

ではそうさせてもらおうかのう」

腰を伸ばし肩を叩きながら笙船は言いつつ、

「井之上先生や。

そういうえば甘草の入荷はあつたのかな」と問うた。

かんぞう

「はい。昨日蓬萊屋から使いがあつたそうで、助左衛門どの曰く：明日になると思いますがまとまつた量が入荷したので持参いだけることになつてます」

新界が即座に答えた。

甘草は乾燥地に自生するマメ科のカンゾウ属植物の根を利用するもので滋養強壮剤と考えられ長崎に寄港する中国船から輸入されていたが、現在でも世界中で極めて広範かつ大量に利用されている薬剤である。

また砂糖の四、五〇〇倍もの甘味があるグリチルリチンを含んでいるが、それが強力な消炎効果が期待できるので潰瘍などの消化器官をはじめ各種の炎症に対して効用があつた。

「それは上々。いまひとつ思い出したが、さんきらい山帰来はいかがかな。

皆高価な薬剤じやから多くは無理じやろうが、切らしては治療ができるんでな」

笙船が再び問うた。

山帰来は「平、脾を健やかにし、筋骨を強くし吐く泄瀉を止める、良薬なり」とされ、主に瘡毒（梅毒）の治療に用いられたが、これまた中国から長崎へ輸入された漢藥であつた。

「これは来週初め頃になるとのお話でした」

「そうか、そうか。承知した。

ではわしは大奥様と茶室にいるので何かあつたら呼んでおくれ
笙船はそう言い残して診療所を後にした。

その後、

「およし先生。ガキが熱出しまして、診てくだせえ」

父親が三歳くらいの男子を抱えて飛び込んで来た。

「分かりました。いつもの、そこにへ寝かしてくださいな…」

およしは子供の額と頬、体に手を当て、

「熱が高いわね。まずは熱を下げないと苦しいでしよう
お文さん。この子の体拭いてあげてください」と願つた。

そういうえば、この向島診療所で壊死した脚を格左衛門が切断し笙船や新界の懸命な治療で命を取り留めたお文が診療所の助手として働き始めていた。

それは春貞の実母弥生が生きていることがわかり、米道格左衛門らの働きで無事江戸に迎えることが出来た元文五年（一七四〇年）だつたからすでに五年が過ぎ

ていた。

お文は傷が完全に癒えた後、新界が図面を書き留吉が作つた義足を使つていた。以前とまったく変わらずとは言えないものの着物の上からは義足とは分からなかつたし慣れるに従い脚の引きずりも小さくなり杖など使わず歩けるようになつていた。

お文は近隣の小作農家だつたが二ヶ月ほど前に夫喜佐治が事故で亡くなり子供もまだ小さいこともあって田畠を耕して云々は続けることが出来ず途方に暮れていったとき、たまたま風邪で笙船の処方を受けたのだった。

事情を聞いた笙船は、

「家はここからどの位の距離じや」と問うた。

「はい。この脚で歩けますので五町ほどだと…」「以外と近かつたのじやな。

で、立ち振る舞いには支障はないかのう」

「この義足のお陰で歩きにはほとんど支障はないです。ただし座るときには取らねえとダメですがね先生」

そんな話しをした後に笙船は、

「変な事を聞くが、気を悪くしなさんな…。

お前さん、喜佐治さんに嫁ぐ前の話しじやが生まれはどこかのう」と問うた。

一瞬怪訝な表情を浮かべたお文は、

「あたしは草加宿の生まれでして、六人兄弟の末っ子。あたりは水田地帯で稻作が盛んだつたので自然に兄妹と一緒に田畠の手伝いをするようになりました。で、十三の頃から口減らしの為もあり、遠い親戚の菓子屋で働いたときに喜佐治と知り合いまして…」

と懐かしそうに呟いた。

「そうかい、そうかい。いや、お前さんの立ち振る舞いが農家しか知らない女には見えなかつたのでな」

一呼吸した笙船は改まつた顔でお文の前に座り、

「お文さんや。お前さん、ここで働くかな」と言つた。

「えつ」

「旦那が亡くなり一人では田畠を切り盛りするのはその脚もあつて難しいと言つたじやろうて。

すでにお前さんはこの診療所でそう二十数度会つてゐるが、お前さんは働き者
のようじやしよく気がつくお人じや。

でな、ここは承知のように人手不足で困つておるが、助手とか下働きにしても誰
でも良いというわけにはいかぬ。なにしろ人の命がかかつておるでな。

その点、お文さん：お前さんなら患者の気持ちもよく分かるだらうしな、子供と
二人生きていける賃金はわしが保証しよう。

それからお子は女の子じやつたな。確か七歳とか…。

これまた一人で留守番させておくのは危ないし可哀想じや。お前さんがよければ
勤めに来る際にここへ連れてきなされ。

ここには赤子も含めて三人の子供がいるで、一緒に遊ぶじやろうしお前さんもよ
く知つてゐる奈美さんらが世話もしてくれようぞ…。
どうじやな」

お文は信じられないといった態で笙船を見つめ、そしておよしを見上げた。およ
しは満面の笑みで頷いてゐる。

不安と緊張の糸が切れたのだろうか、お文が声を上げて泣き出し、隣の部屋の新界も何ごとかと顔を出した。

診療所の助手としてこれまで留吉の女房奈美や静香たちが交代で勤めていたが、患者の数が多いことは勿論、奈美には子供の世話があるし静香にしても別の役目があつた。そして何よりも小川笙船が日々常勤から外れることもあり人手不足は否めなかつた。

ということで春貞の許しも得てお文は向島診療所初の通いの助手として働くことになつた。

当初は水くみや湯沸かし、洗濯といった下働きが多くかつたが慣れるに従つて診療部屋で患者の応対もするようになつてきたしとにかく一生懸命働いた。

気働きができるお文はすぐに仕事も覚え、医師たちは勿論屋敷の面々らと言葉を交わすようになつたが、口癖は「診療所はともかく、このお屋敷はどういうお屋敷なんかいまだにわからねえ」だつた。

またお文の子供であるお輝はすぐに秋子の一子道之助と仲良く遊ぶようになつたし、春貞と幸江の娘理子はすでに十七歳に成長していたこともあつて七歳のお輝は皆に可愛がられた。

向島診療所はまだまだ患者は途切れそうもなかつたが、小川笙船は弥生の誘いがありお輝と共に茶室に座していた。

「どうだお輝。茶は嫌いかのう」

笙船が問うと、

「だつて先生、これ苦いもん」

と顔を顰めたが、隣に置かれた菓子には目を輝かした。

「子供には薄茶も濃い茶も美味しいとは感じられないんでございましょうな」

弥生が笑みを浮かべながらお輝の膝に手を置いた。

「そういえば大奥さま。お目の方はいかがですかな」

笙船が茶器を置きながら弥生に問うた。

「お陰様で昼間はこうして手近なことには目が利きますが夜は見えませぬ。しかしこればかりは仕方なしと諦めております」

弥生は茶釜に目をやりながら答えた。

「内症のご病気だて、視力を回復する手段がないのでいかに現状を維持できるかに我らも注視しておりますが明後日は診察日でございますので宜しゆうお願ひしますぞ」

笙船が念を入れた。

大人二人が話をしているとき、お輝は白湯を飲みながら落雁を上手そうに食べていた。

「おお、お輝。落雁は好きか」

「うん」

「そうかそうか。ではな、この爺さんの分もお食べ。

もうすぐ母様がお仕事終えて迎えにくるころじや。残つたら持ち帰つてもよいぞ」

相好を崩した笙船がいうとお輝は笙船の片腕にしがみついて喜んだ。

「先生まるで孫ができたようでございますな」

弥生が冷やかすと、

「いや、わしの歳からすればひ孫かのう。

いざれにしても子供は可愛いものじやて」

そんな

他愛も無い話しをしていると、

「大奥さま、笙船先生。子守まで願つて申し訳ございません」

お文が茶室に顔を出した。

「お輝、ほら母様が迎えに来たぞ。

お文さんや、どうだなその後大きな問題はなかつたかな」

笙船が問うと、

「はい、先生。今日も忙しかつたですが、井之上先生とおよし先生の夫婦医者は大したお方たちでございますよ」

と躊躇^{にじ}り口で立ち話だ。

「ほう…」

笙船はお輝の手を引きながら茶室から出るとお文は頭を下げながらお輝の手を引き、

「だつてさ、朝から先ほどまで昼餉の半時ほどを除きはずつと患者と向き合つていなさるけど、叱ることはあつても嫌な顔をした所を見たことがねえです。お疲れだと思いますがなかなかできることではねえですよ先生」

お文は帰り支度を確認しながら呟いた。

「そうじやな。しかしお前さんといつも笑顔で患者と接しておるじやろう。大

したものよ」

笙船がお文の働きぶりを褒めていると田宮助左衛門が小ぶりの籠を持って現れた。

「おお、間に合つてよかつた。

お文さん、秋子と奈美がな、余り物だがお文さんへとのことじや。米少々と味噌、佃煮が入つてゐるようだからお輝ちゃんと食べてくだされ」と差し出した。

「旦那さま。いつもありがとうございます。

給金をいただいておるのに申し訳ありません。けど助かります」

お文は何度も頭をさげながら春江館脇の小径をお輝と共に帰つて行つた。

「明日もまた頼みますぞ」

笙船の声が夕焼け空に響いた。

第四章 新將軍誕生

一

九月一日、家重が次期將軍となる前触れのような出来事があった。それは西丸老中酒井忠恭が本丸老中へ異動及び同首座となるに伴い、松平乗邑は老中次座に降格となつたのである。

そして九月十七日、春貞は吉宗から登城せよとの命を受け一人で千代田城に向かつた。

白書院に案内されるとそこにはあの寺社奉行・大岡忠相が和やかに座して手招きしているではないか。

「これは大岡さま、お久しぶりでございますな」

春貞が丁寧に挨拶すると大岡は、

「お手前にお会いしたいと思つておりましたが、お忙しいご様子についてお声をか

げづらくなつておりました。その上に昨年は京で帝に拝謁されたとか、相変わらず驚く事をおやりですな」と破顔した。

「いや、ここだけの話し、それがしが好んで京に向かつたわけではございません。これすべて上様の意を汲んでのこと。

それがしはただの使い走りでございます」

春貞も笑いながら応じた。

「ところで春貞どの。本日呼ばれたのは我ら一人だけのようですが

大岡も少し怪訝な表情で呟いた。

四半時ほど二人は待たされたが、吉宗が大股で現れた。

「済まぬな、遅れてしもうた。許せ。

今日はな、将軍として最後であろうと紅葉山御宮と御靈屋に参詣しておつた。

幸い天候にも恵まれたしこれで思い残すことはなくなつた：」

ちなみに、紅葉山とは江戸城内中央にある小山で、歴代将軍の靈廟が営まれていたが「御宮」とは紅葉山東照宮のことである。初代将軍徳川家康の廟所だつた。たゞ現在、紅葉山にあたる地は皇居内があるので、その遺構を見ることはできない

という。

二人の前に座した吉宗はおもむろに語り出した。

「すでにお主たちは承知のように家重も一人前となつたのでな、この度政権を譲り、余は西ノ丸に移ることに決めたわ……」

「ははっ」

二人は思わず平伏した。

「今日お主たちを呼んだは二人に頼みがあつてな」

吉宗は言葉を選ぶかのように、

「家重に政権移譲後も余は大御所として後見役を務めるが、これまでなかなか思い通りにはいかなかつた改革の仕上げをしたいと考えておる」

「……」

「それには政権交代によつてな、これまでの政策が急変しては世の混乱を招くことになる。

無論余は大御所として努力はするが、將軍のときのように思うようにはいかぬし家重の意も尊重せねばならぬ。

そこでな、そちたち二人は陰日向となりこれまで余を助けてくれたように家重を

助けてほしいのじや…」

吉宗の話しが切れぬうちに春貞が、

「お、お待ち下さりませ上様。

我らは老中や御側御用のお役目ではございませぬ。

大岡さまは寺社奉行、それがしは幕臣でもございませぬ。それがしはもとより失礼ながら大岡さまにても上様だからこそのご奉公でございましたが、家重さまのお考えもございましょう。

我らに何ができましようや」

平伏しながら訴えると大岡も大きく頷いていた。

「そんなことは百も承知ぞ。

ただな、家重の政権となれば人事も大きく変わることになろう。

いつまでも余が横車を押しているわけにもいかぬ。しかしな、政策というものはその実施に際しどのように心あるものとして実施するかが重要じや」

ふと息を吐いた後に吉宗は、

「忠相。その方は余の申すことはすぐに分かろうものと思うが、町奉行所時代のことを思い出してみろ。

罪は罪として裁くのは当然のことじやが、実際にどう裁くかにその方が多大な苦心をしていたではないか」

「御意」

「藩政とて同じ事よ。例えは家重が間違った判断をしたとして、それに異を唱えることが出来れば上々じや。

しかしそれができる立場だとしても実際に策を行う側のやりようで民の思いは違つてこよう」

「確かに。しかし我らにどうせよと仰せられますか」

大岡は問うた。

「そのことよ。両名共近う：」

その後、吉宗と大岡忠相、松平春貞は新將軍家重に仕える人事問題にまで話しが及んだ。

吉宗は大岡忠相のつねに現実から目をそらさず必要な政策を次々にうちだしていく勤勉な実務型政治力をかつていたし、これまた春貞に対しては広い視野はもとより何者にも束縛されない立場で公平な判断ができること、そして必要な時には吉宗が与えた生殺与奪の命により誰に対してもその命を奪うことができる技量を

抑止力としても期待していたのである。

そして延享二年（一七四五年）九月二十五日、朝から曇りがちの一日だつたがついに將軍宣下と共に吉宗は隠居し將軍職を長男家重に譲り、自分は大御所として睨みを利かすことを発令した。

ともあれここに第九代征夷大將軍、徳川家重が誕生した。

春貞としては正直、これで自分たちが襲われる理由はなくなつたはずと考えたが格左衛門は、

「春さん。しかし油断は禁物ぞ。

恨みというものは理屈抜きで長く続くものだ。

己の思いが叶わなかつたのは春さんのせいだと逆恨みされる可能性もあるでな」と主張した。

「なるほど。そうでなければよいが、まだ安心できぬか？」

春貞が呟いた。

夕餉の前の一時、診療所の面々も次第に居間へ集まつてきた。

田宮助左衛門が、

「米道どのの申す通りだと思いますぞ。それに、城中の混乱はこれからでござりますでな」

と一同を見回して言い切つた。

「といいますと…」

井之上新界が薬籠を脇に置きながら不思議そうに聞いた。

「將軍が代わったのです。それに伴い人事や制度の見直しも多々ございましたよう。特に例の老中どのが老中次座のままで済むというはずもござりますまい」

城の事情に詳しい助左衛門が言つた。

「なるほど。そうした城中の新しい人事の結果、その恨みつらみも残りましょくからな」

横手富三郎が頷きながら呟くと小川笙船が湯飲みを置きながら、

「人というものは実に厄介なものよのう」

とため息交じりに言い切つた。

そうした春貞たちの杞憂を知つてか知らずか、家重は將軍就任早々思い切つたことをやつた。

大きな決断とはまず弟宗武に対しての処分である。

その宗武は、向こう三年間の登城停止処分を受けたが四男の宗尹も同罪とみなされた。

宗武は自身将軍就任を望んでいたこともありてか、家重と決まつた後も家重の欠点をあからさまに列挙し公言したため父の吉宗から謹慎の処分まで受けるはめとなつた。

後の事だが、第七代将軍家継の生母、月光院の斡旋により宗武は登城を赦され、表向きは和解したもの、以後も宗武は生涯にわたり家重と対面することはなかつた。

こうした情報をいち早く春貞らにもたらしたのは申すまでも無く佐吉であつたが城内の混乱は大変なものだとの一言を忘れなかつた。

「まあ、家重さまからすればこれまで受けた辱めを考えると当然の行動だといえるだろうが、それにしても決断が早かつたな」

腕を組みながら呻つた春貞に佐吉が、

「春貞さま。実は家重さまの憂慮は宗武さまが簡単に将軍職を諦められないことにあると存じます」

「どうと…」

「はい。宗武さまは家重さまが将軍となられてからもあからさまに将軍に相応しいのはご自分であることをふれ回るだけでなく、家重さまの欠点をあれやこれやと公言して憚らないご様子。

このままではいわゆる老中次座の松平乗邑さまを柱に一波乱あるのではないかと危惧されたものと思われます」

「なるほど。早めに手を打たないとそれこそ幕府が二派に別れて戦う羽目にもなりかねないということか」

「はい」

出された茶をひと飲みして佐吉はふうっと重い息を吐いた。

そのとき格左衛門が、

「まあ城中のことは我々にはどうしようもないが春さん、松平乗邑は老中筆頭から次席に降格となつた。

問題は彼奴がすんなりと、それも廢嫡しようとした家重さまの命での降格を大人しく飲むものだろうか」

と一同を見回しながら言つた。

「ふうむ、なるほど。

老中の差し金で襲われた我らからしてみるとまたまた最後の巻き返しに出る畏れも危惧されますな」

万之助が同調した。

「おいおい、二人とも物騒な物言いをするじゃあねえか」

春貞は笑いながらそういういつたが、ふと真顔になり、

「しばらく注意を怠らないようにしよう」

と己に言い聞かせるように呟いた。

二

そしてついにその日がやつてきた。

十月九日、松平乗邑は老中罷免となり翌十日には三月に加増されたばかりの一万石を没収された上に出仕停止処分を受け、さらに加増地および江戸城西之丸下にあつた屋敷も没収されたうえ隠居および蟄居を命じられた。

無論このことは松平乗邑が次期将軍に弟を推し、家重を廃嫡しようと動いた事に
対する処罰であつた。

また確たる証拠はないものの、乗邑が春貞に向けた数々の無礼を償わせる意味合
いもあつたものと思われる。

ちなみに乗邑だが、次男の乗祐に家督相続は許されたものの、間もなく出羽山形
に転封を命じられ翌年の延享三年、権勢を誇った松平乗邑は失意の中、享年六一
歳で死去する。

松平乗邑が老中罷免となつた二日後の十月十一日、將軍家重と大御所吉宗がそろ
つての能見物が開かれた。

春貞にも招待が届いたものの幕臣でもないからと固辞した。

しかしその様子は翌日の夕刻大岡忠相が屋敷にいそいそとやつてきたことで春貞
らにも朧気ながら分かつたような気がした。

「春貞どの。特に用事ではございませんでな、しいて申せば笙船先生に痔の薬を
いただこうと：いや、正直申せば昨日の愚痴を聞いていただこうと罷り越ししまし
た」

大岡は苦笑いしながらふと勇ましい声のする春江館に目を向けた。

「我が儘を申すが春貞どの、お話しの前に道場を拝見できますか」と問うた。

「勿論でございますとも」

春貞も破顔して大岡を道場に案内した。
そういえば大岡忠相はこれまで数度屋敷を訪れたが道場に入つたことは無かつた。

道場では横手富三郎と夏穂、幸江と理子、格左衛門と万之助、そして留吉が棒術

で素手の静香と相対していた。

それぞれが大岡の姿を認めて動きを止め頭を下げる、

「邪魔をして済まぬ。

すでに本格的な稽古をしなくなつて久しいが、各々方のお姿を拝見してこの忠相、些か血が騒ぎ申した。

片隅で木刀を握らせては貰えまいか春貞どの」と願つた。

「歓迎いたしますでござりに」

春貞は大岡と一緒に道場に上がつた。

稽古をしていた一同は場所を譲る形で板壁に座した。

大岡忠相というと我々には「名奉行」という言葉が頭に浮かぶが、それでは武士として剣の腕はいかがだつたのだろうか？。

大岡忠相は宝永元年（一七〇四年）というから忠相二七歳のとき、御徒頭に進み十番組に編入されると共に旗本としては名誉ある布衣（狩衣の一種で無紋のもの）の着用を許された。

この役職は将軍が出行のおり、行列を先導する役であり、特に武芸に熟練したものから選ばれることになつていて。したがつて若き日の大岡忠相は身体壮健で武芸も人より抜きんでていたことは確かであつた。

道場に上がつた大岡は神棚に頭を下げ、二本差しを春貞に預けると同時に木刀を受け取つて床を確かめるように数度踏みしめた。

このとき忠相は六八歳であつたが、年齢以上に消化器系の病と痔に苦しめられており若き日の凄みは感じられなかつたものの、木刀を青眼に構えた大柄な姿は惚れ惚れするものであつた。

「大岡さま。僭越ながらお相手いたしましょうか」

春貞が問うと、

「いや、情けないが立ち会わせていただく胆力はございませぬのでな、お気持ちだけで嬉しゆうござる」

と言いながらも青眼の構えを一時崩さずにいた。

その四半時後に大岡は居間に場所を移していたが、昨日の出来事を忌憚なく話すことができるのは春貞しかいなかつたに違いない。

客間には春貞の他には田宮助左衛門が同席していた。

「大岡さま。昨日はなにか不都合がございましたか？」

春貞が問うと、静香らが運んで来た茶を美味そうに含みながら大岡は、

「人事が変わったからか、あるいは意図的にそれがしを廃しようとする者がおるのか分かりませんが、あつてはならないことがあり申した」

普段は温厚な大岡忠相であつたが律儀なだけに不作法や手際の悪さは許せないものがあつたようだ。

忠相によれば、能見物の後参觀者一同に祝儀として料理膳が振る舞われた。

参觀者たちは身分により膳が置かれる部屋が違い大岡の場合は雁之間に行つてみると膳が無く探してみると芙蓉之間のそれも旗本の席に置かれていたという。

忠相は老中や目付衆に苦情を言うだけでなく料理の席次係であつた安部主計頭に

直々に苦言を申し渡したという。

大岡のやり方は春貞には到底でき得ない執拗さにも思えたが、間違つたことが大嫌いな大岡忠相の面目如何といつたところか…。

「なるほど、それはさぞご不愉快なことでございましたな。

それがしなら膳を蹴つて帰つてくるところでございますがな」

春貞も大岡の意を汲み取つたか話を合わせた。

「いや、思い過ごしであればよろしいのですが、大御所さま子飼いのそれがしでございましたので家重さまらの側近らに疎まれたのかも知れませんな」

忠相は城中では決して見せない心配そうな顔をした。

「いや大岡さま。それは思い過ごしでございましょう。

吉宗さまの政権で特に後半期に改革の中心に立ち、あれだけ華々しく活躍していった松平乗邑さまをお考えなされませ。

ご承知のように吉宗さまご隠居と共に老中罷免、そしてそれだけでなく処罰までされさております。

それと比べて大岡さま。貴方さまはそのお役目微動だにしないではございませんか。それだけ大御所様のご信頼が厚く確固なものであつたかを示すものですし、

そのご信頼は家重さまも十分にご納得なされているからこそでございましょう」春貞に慰められ、気をよくしたか大岡忠相は小川笙船の処方した薬を大事そうに懐に入れて笑顔で戻つて行つた。

大岡越前が帰つた後の居間で、

「しかし大岡さまは珍しく愚痴を言われておりましたな」

助左衛門が言うと、

「俺は固辞して正解よ。あんな堅苦しい場所で平静を保つていられるお偉方の神経が分からんわ」

春貞が悪たれをついた。

「それでも宗武さまに対するご処分はそれとしても松平乗邑さまへのご処分は過酷でございますな」

田宮助左衛門がこれまた真顔で呟いた。

「老中罷免だけでなく、ほんの七ヶ月前に加増された一万石を召し上げられた上に蟄居となつたことかい」

春貞が問うと、

「はい。一万石の加増は吉宗さまが松平乗邑さまのこれまでのお働きを評価されたためお与えになつたと聞き及んでおります。それを数ヶ月のうちに家重さまの命で取り上げなさつたわけですから…」

「極楽から地獄へ真っ逆さまといった感じか」

「そのとおりですな。それだけでなく蟄居とは明らかに罰せられたわけですな」

それまで静かに話を聴いていた小川笙船は、

「吉宗さまは将軍職をお譲りになつたとはいえ大御所として君臨なさつておるはず、吉宗さまと家重さまとの間で確執が生まれないとよいがのう」と心配顔で呟くと助左衛門は、

「先生、それはご心配ないと 思います。

上様：いや大御所さまは家重さまが取り上げなさることを十分承知した上で加増を計つたのではないでしようかな。

また先ほど大岡さまのお話しへ能見物に家重さま吉宗さまが並んでご出席なされ和氣藹々にご観賞なされた由にございました

と言い切つた。

「ふうむ。吉宗さまの内意も含んでいるとすればやはり俺たちには到底分からぬ

神経よなあ」

春貞がため息をつくと助左衛門が、

「春貞さま。うがつた見方かと思いますが、事は春貞さまが言われる以上に吉宗さまが熟考された結果かも知れませぬ」

と言うと春貞は、

「どういうことだ助左衛門」

と問うた。

「吉宗さまが大御所となられて…とは一見以前に春貞さまがご進言なされたことを受けられて…のようにお振る舞いですがな、それがしにはご自身の政権延命の策とも受け取れるようと思えるのです」

助左衛門が真顔で言うと、

「ふむ、面白い。続けてくれ」

春貞は畳に寝転びながら願つた。

助左衛門が言うには、吉宗としては是非にも改革を続けなければならないと考えているが三十年という長きに渡り将軍の座についていたものの成功したとは到底いえない結果だつた。

このまま同じことを続けても己の体力も落ちてきたり上手くいくとは思えない。ではどうするか。

表向きは家重を立て、その実は大御所政治という形を変えての改革政治を続けようという意図があつたのではないか？。

「大変ご無礼な物言いでございますが、松平乗邑さまへのご処分は政権の形を変えるため、そしてこれまでの反発や失策の責任を取らすために必要なトカゲの尻尾切りだつたのではございますまい。

となれば例の一万石の加増はそうした意図を覆い隠すための策…」

茶をひと飲みした助左衛門は、

「春貞さま。少々古い話で恐縮ですが、あの老中水野忠之様が享保十五年六月に辞任されたことをご記憶でございますか？」

助左衛門はいきなり話柄を変え、十五年前のできごとを切り出した。

「うむ。水野様とは些か行き掛かりがあつたが、急におやめになられたことは知つておる。ご病氣だつたとか…」

春貞は天井を眺めながら記憶を辿った。

春貞は初めて千代田城に助左衛門、弥三郎と共に登城したおり、松の廊下で水野

忠之に咎められ意図があつたとは言え「無礼者！」と水野を罵倒したこと今更のように思い出した。

「それがし、お屋敷でご奉公をさせていただくことになつた際にお話し申し上げたと思いますが、享保十年に御納戸同心の務めを辞めましてございます…」

「覚えておる。同輩の裏切りで役を追われたと聞いたな」

春貞が応じると、

「はい。したがいまして水野忠之様が老中を辞されたときはまだ城中におおりましたので様々な噂を耳にしておりましたが、水野忠之様は本当の所辞任ではなく罷免されたらしいのです」

「ほう、初耳だな」

春貞が声を上げると一同も頷いた。

「当時上様は米価政策にご尽力されておりましたが、ご無礼ながらうまくいきませんでした。その責任は老中首座でございました水野忠之様に向けられましたな」

と助左衛門が続けた。

事実当時の市中で水野忠之の評判は最悪で、

(無理で人をこまらせるもの、生酔いと水野和泉守)

(わるいもの、水野和泉守 懐中おはぐろ)

といつた落首が出回っていたほどだつた。

「水野様の罷免は本来最高責任者でございます上様がうけるべき非難を水野様におかぶせになつたともっぱらの噂でございました」

言い終えた助左衛門が「ふうつ」と息を吐いた。

「なるほど、これまたトカゲの尻尾切りでございましたか」

万之助も苦虫を潰したような顔をすると春貞は、

「上様に言わせれば、それもこれも御政道に必要なことと言われるだらうが、助左衛門の話しさ案外的を得てるかも知れんな。」

上様：いや大御所さまはやはり一枚も二枚も俺たちの先を読む喰えないお方よな

あ

春貞が思わず唸つた。

三

新将軍が決まつたことでもあり、春貞はひとつの大好きな区切りがついたと安堵したが十一月に入つたばかりの朝、しばらく姿を見せなかつた佐吉が家重の命で登城するようとの文を持ってきた。

「春さん、早速登城せよとはどういうことなのだろうかな」

格左衛門が心配顔で問うた。

「そうよなあ。俺にも分からんが、改めてなんやかんやの命を下されても敵わんな。いや、それ以前に上様：いや大御所さまから授かつた生殺与奪の命を返上するよき機会かも知れぬ。

格左も同道してくれ」

とそんなわけで、早速春貞は米道格左衛門を伴として千代田城に向かつた。

茶坊主に導かれて春貞は白書院に座したが、その後ろ一間ほどに格左衛門が座していた。またすでに何人かの目付たちが控えていたが、春貞はしばし待つ間瞑目していた。

この場で、この白書院で幾度となく將軍吉宗とのやりとりがあつたことを思い出していたのだつた。

その吉宗が大御所となつたとはいえ隠居した…。

春貞の心に一抹の寂しさが沸いてきた。

思つたより早く上段に家重と共に吉宗が現れ、春貞の斜め前にはあの大岡忠光が

春貞に会釈をしながら座した。

春貞と格左衛門が平伏していると家重が言葉を発したがそれを理解できるのは大岡と春貞だけで父の吉宗でさえ意味が分からなかつた。

「…つてうおあ…い、るす（面をあげよ、許す）」

「ははっ」

春貞は静かに顔を上げると笑顔の家重とその隣に吉宗が満足そうに座していた。

「家重さま、いや上様…。征夷大将軍ご就任祝着至極に存じ奉ります。また大御所さまもご健勝の由、春貞これまでのご厚情に対し心から御礼申し上げます」

春貞が再び平伏しながら祝いを述べると家重は、

（そちらのおかげぞ）

と返すと、

「春貞。いまさら堅苦しい挨拶は我らに似合わぬ」
吉宗も機嫌良く言つた。

一時の昔話に花を咲かせた後に春貞は頃合い由と判断しあらかじめ心に溜め置いた願いを口にした。

「上様。春貞、恐縮でございますがこの機会にひとつ願い事がございます」

平伏すると、

(なんなりと申せ。許す)

家重が將軍の顔で応じた。

「有り難き幸せ。

願いとは大御所さまから命じられておりましたそれがしの生殺与奪の命、新將軍さまご就任のお目出度い機会に御返上申し上げたくお願い申し上げます」

春貞が言い切ると一瞬の間を置き、

「な、な……ん

珍しく家重が大声を出した。

大岡忠光も、

「上様がならぬとの仰せでございます」

ときつとした態度で家重の言を伝えた。

(春貞。大御所さまが命じた生殺与奪の命、そちにとつて重荷であることは重々承知しておるが余はまだ新米の将軍ぞ。これからも何かとそちに助けて貰わねばならぬ。)

これはそちにしかなし得ぬ命ぞ。

これからも徳川の世が安泰に続くよう、そしてな、余を補佐してくれ、頼む)
家重が、新将軍が頭を下げたから小姓や春貞の後ろに控えている目付たちが驚愕した。

しかし大御所の吉宗も満足そうに笑っている。

「今日そちを呼んだのは他でもない。家重は余が進めてきた改革の藩政を手本にさらに工夫を重ねて進めると言つてくれておる。

とはいっても口さがない世間では早くも余と新将軍の意見が食い違つてゐるという噂もあるようだが、今日はそうした事実はないことをな、そちにも認識してもらうための場ぞ」

「ははつ」

「本来過日の能見物にそちが参ればその時に話そうと考えておつたが、忠相は参

つたがお主はやはり断りおつたでな、あらためてこの場を設けたのじや」

吉宗が言うと家重も頷いている。

「それがしごときの為に貴重な時をお使いいただき申し訳ございませぬ」

春貞はまたまた平伏しながら言つた。

「よいよい。くれぐれもな、今後とも家重を助けてくれ。

頼んだぞ」

すると再び家重が口を開いた。

（それから春貞。將軍となつた余は以前のようにそちの屋敷にそうそう出向けぬ。といつて度々登城を命じるのでは迷惑であろう故、必要な時にはそこにおる大岡忠光か先に紹介した田沼意次に使いをさせるで宜しくたのむ）

（大儀であつた）

こうして大御所および新將軍家重との短い会見は終わつた。

その後そそくさと千代田城を後にした春貞と格左衛門だつたが、最初に口を開いたのは格左衛門だつた。

「春さんの願いは叶いませんでしたな」

「うむ」

「しかし申すまでもないが、それだけ新将軍の春さんへの信頼が厚いということ
でしようから悪い事ではないと思いますがな」
慰めるような口ぶりで格左衛門が呟いた。

春貞が城から戻ると幸江らが慌てて一通の文を差しだした。

「佐川太一さまからということはもしや松谷さまが…」

幸江の隣では弥生がヤキモキしながら春貞が文を開くのを待っている。

春貞は着替えもしないままに袴の姿で居間に座し文を開いた。

奉書を巻き開くにつれ春貞の目から涙が落ちた。

「嗚呼…春貞、やはり松谷さまは…」

弥生の間に無言で頷いた春貞は文を丁寧に巻き戻して母弥生に渡した。

「やはり身罷れましたか」

文を開いてすぐ、弥生の涙が奉書に落ちて墨を滲ませた。

弥生から受けた幸江が一読し、

「太一さまによれば苦しまず穏やかに亡くなられた由、笙船先生に処方いただいたお薬が効いたと書かれております」

と小川笙船に告げながら文も渡した。

「世が世なら、酒で失敗しなければ…ひとかどの藩主にでもなれた男よなあ。
惜しい男を亡くしたものよのう」

笙船が力なく頃垂れた。

そのとき格左衛門は涙を溜めつつ、

「いや、松谷どのは酒好きも含め、己の思うように生ききつた武士もののふぞ。

きつと夢にまで見られたというこの屋敷で過ごすことが出来、満足なご最後だつ
たに違いあるまい…」

と言い切った。

横手富三郎は松谷久四郎が死んだことをにわかに受け入れがたくじつとしていら
れなかつたのだろう、

「うわああ」

と低い声を上げながら春江館に駆け込み、木刀を振り回し始めた。
夏穂と静香は肩を寄せ合い、ただただしゃくり上げていた。

松谷久四郎の訃報があつてから一ヶ月ほど経つたある日、髭面で着物の裾を尻つ端折りした男二人が門前で声を上げた。

「三島の雲助宿から使いにきましたあ」

：の声を聞き、ちょうど春江館から母屋に向かつていた稽古着姿の米道格左衛門が開き門の勝手口から顔を出した。

「おお、これは：權蔵さんではないか。

入れ、入つてくれ。

なにか出来しうつたしたか

心配顔で問うた格左衛門に、

「いやあ、そんなんではねえんだ旦那。

新しい頭領となつた佐川の旦那から大切な届け物を持参したんですけど
權蔵が背負つてきた荷を降ろしながら言つた。

「そうか、まずは上がつてくれ」

格左衛門は磊落にいい、權蔵と連れの男を客間に通した。

「だ、旦那。わしらは客ではねえ。かまわんでくだされ」

髭面の権蔵が恐縮していると春貞が入ってきた。

春貞が何者であるかをよく知っている権蔵はその場に平伏した。

「権蔵さん、頭を下してくれ。

どうした。三島でなにがあつたのかい」

春貞も格左衛門と同じことを問うたので権蔵はにやりと笑いながら、

「雲助宿はお陰様でな、安泰ですだ。

今日は佐川のお頭から命じられて届け物を持参したんですね」

と答えながら固く結ばれていた風呂敷包みを開き始めた。

「荷なら送ってくれれば良いものを、わざわざ何ごことだい…。

おつと、ありがとうよ」

亞耶が運んで来た茶を手にしながら春貞が言うと、

「いや、殿さま。とても大切なものだで、そこいらの荷運びには預けられないんだて…」

そういうながら奉書に丁寧に包まれたものを春貞の前に差し出した。

「殿さま。こりやあ松谷の頭の髪（もどり）ですだ」「なに…」

格左衛門が叫んだ。

「別途佐川の頭より文も預かつていてるで読んでください。詳しい理由が書いてあるはずじやが、松谷の頭の遺言というか、たつての願いでして…」

権蔵の話と佐川太一からの文によれば、松谷久四郎が息を引き取る際に最後の願いだとして無理を承知で春貞に願つてくれとの話を始めたのだという。

それは迷惑とは承知の上だが、この髪を屋敷の隅にでも埋めてくれないかという願いだつたという。

「いや、殿さま。松谷の頭は江戸から帰つてからも口を開けば殿さまたちの話いや道場で稽古をした話、そしてお屋敷が襲われなすつたようですが、そのときの様子ばかりを繰り返して話すんですけど」

格左衛門はすでに目を真っ赤にしていた。

「でな、自分が死んだらこの髪を殿さまに託し、お屋敷の片隅に埋めてもらえるよう願つてくれというのが頭の遺言でな…」

「……」

「あれば、いつも殿さまや米道の旦那らと一緒にいられるし皆の稽古も眺めていられるから…とまあそんなわけとして。

こんな願い、お頼みできますじゃろか、殿さま」

権蔵は連れの男と一緒に畳に額を付けるようにして頭を下げた。権蔵が恐る恐る顔を上げると春貞の顔は涙に濡れていた。

「し、承知した。

我らも松谷どのと常に一緒にいることは望外の喜び。

ご遺言どおりにいたすことにしてよう。

佐川どのにはその旨、くれぐれも宜しゆう申し上げてくだされ」

春貞が言い切ると格左衛門もガクガクと頷いていた。

その夜、権蔵らは春貞の屋敷に泊まり、翌朝早く屋敷を後にすることになった。

「佐川どのにくれぐれもよろしゅうな」

春貞はそう言いながら佐川太一宛ての文一通を差し出し、共に包金二十五両と別途奉書に包んだ一両を（包金は墓を建てる足しに、そしてこれはお主らの手間賃だ）と権蔵に握らせると権蔵は驚いた顔をしながらも嬉しそうに何度も振り返りながら頭を下げつつ遠ざかっていった。

「春さん、それがしに案があるのだがな……」

門前から母屋に戻りながら格左衛門が呟いた。

「髻のことか」

「うむ」

格左衛門が言うには、髻は屋敷のどこかに小さな塚を作り供養すると共に位牌を作つて仏壇の一郭に置きたいとのことだつた。

「そうだな。話しを聞いたときは我が家の菩提寺に供養しようかとも思つたが、俺たちはそれで満足だとしても仏はそれを望まんだろう。

位牌作りは長兵衛さんに頼むとして、塚はどこにするべきかだが……」

「春さん、やはり春江館の裏の空き地あたりが良いのではないですかな」

「ふむ。やはり松谷どのは道場の近くの方が喜ばれるだろうからな……」

では格左。助左衛門に願い、早々に形にするようにしてくれ。そしてな、この髻は塚の準備ができるまで道場の神棚に祀つておこうか……。

その方が松谷どのは喜ばれようからな」

「畏りました」

松谷久四郎は雲助たちの親分として慕われ続けたこともあり、その遺骸は太一をはじめ雲助たちによつて丁重に葬られた。そして世話になつた雲助たちは春貞らが願つた通りに墓を建て「あの世でも好きな酒を」と墓には盃と徳利を刻んで供

養した。

その墓は箱根街道脇にある駒形諏訪神社手前に「雲助徳利の墓」として現存している。

さらに春江館裏に小さな塚を作り髪を埋めて供養したが、いつしか道場に向かう女弟子たちもその塚に手を合わせるようになつた。そしてタイ捨流の名手、松谷久四郎にちなみ、この塚に手を合わせれば剣術の腕が上がると言われるようになつたという。

四

波瀬万丈の延享二年（一七四五五年）もすでに師走となり、体を切り裂くような冷たい風が吹き始めていた。

その二日に田沼意次が伴を連れてやつてきた。

「これは田沼さま。お寒いところご苦労様でございますな」

春貞が客間に誘い、床の間がある上座を勧めたが意次は、

「春貞さま。それがしは家重さまの小姓に過ぎぬ若輩者。
上座に誘われる身分ではございませぬ」

と言つて頭を下げた。

そのとき静香と理子が茶と菓子を運んできた。

「ありがとうございます」

意次が軽く頭を下げつつ礼を言つた。

「なにか上様にございましたのか」

意次訪問の意を春貞は問うたが破顔した意次は、

「いや、別段問題が出来しうつたしたわけではございませぬ。」

頂戴つかまつる……」

茶器に手を伸ばしながら意次は、

「私事でござるがそれがし来年か再来年に小姓組番頭、奥勤兼務に異動と上様から命じられております」

「それは、ご出世でござりますな」

春貞は素直に思うことを口にした。

「恐縮でござる。しかるに軽輩者でございますので上様の意に沿つたお役目がで
きるものか大いに不安でございましてな。

そうした事を過日上様に申し上げた際に『今のうちに大いに勉強することが大切
だ』とお声をかけていただきましたが、御側におられる大岡さまから『時折上様
のお許しを得て向島のお方にいろいろとお話しを伺うのが宜しかろう』とお言葉
をいただきました』

田沼意次は茶器を置きながら、

「大岡さま曰く、勉強も多々方法があろうが一番は知見の高いお方から直にご意
見を伺うのが良いと申されましてな…」

と訪ねてきた理由を話した。

「大岡様の言は確かでございましょうが、それがしほ市井に身を置く浪人者。到
底知見云々を期待されても恥をかくだけでござる」

春貞は苦笑しながら応じた。

「いや、その市井に身を置かれておられることが失礼ながら我ら城の中にある者
にとつて新鮮でありそのお話は政に活かされるべきとのお話でござつた…」

意次はふと息を吸い、

「春貞さま。政で一番留意すべきはなんでございましょうか」と真顔で問うた。

「これはまた難しい問い合わせでございますな。

仰せでございますので僭越ながら思いを述べさせていただきます。
まず戦いのない世であることは一大前提でございますが、市井の者、民の生活を
豊かにできたとするなら必然に武家たちの生活にも活気が出てまいりましょう
な……」

春貞の話しに被せるように、

「市井の者たちの生活を豊かに、活気に満ちたものにするにはどうすればよろし
いか」

身を乗り出すように意次が問うた。

苦笑いしながらも春貞は、

「あくまでそれがしが思うところでございますが、まずは商人たちを活気づかせ
ることができれば金が回る理屈ですし日々の生活に楽しみが生まれるような気が
します。

人は食うのみで生きるわけではございませぬ。楽しみがなければそれは家畜同様の生き様となつてしまいましょうし幕政に力を貸す氣にもなりませんでしょな。

それがしは越後屋の三井高房さんをはじめ多くの商人たちと縁があり交流がござりますが、皆政の行方には敏感ですし商いの経験から我らには気がつかない知見を多々持つていると思つております。

それこそそれがしより市井の商人たちの話を真摯にお聞きになるのも一考かと存じますが

春貞は治世者の多くが市井の生活や何を望んでいるかを知らなすぎると思つていたのでそう答えた。

「なるほど商人を鼓舞できれば金が回り世に活気が生まれるというお話しさは確かに説得力がございますな。

これまで城の人間は商人を押さえつけることしか考えない傾向がございましたからな」

田沼意次は後に側用人・老中として絶大なる実権を握り、伝統的な緊縮財政策を捨て、商業資本の利用など積極的な政策を取つたことが知られている。さらに蘭

学を手厚く保護し、足軽身分だつた平賀源内などとも親交を持った。

こうした自由な気風のなか、江戸では大槻玄沢が蘭学塾を開き、安永三年（一七七四年）には杉田玄白、前野良沢らがオランダ語医学書の「ター・ヘル・アナトミア」を翻訳し「解体新書」を刊行。市井では庶民文化が興隆するものの一方で意次は賄賂政治の代名詞としても批判されるようになる。しかしそれはまだまだ先の話であるが…。

ともあれ田沼意次が商人を重用する切っ掛けはこのときの春貞の話しに共感したからかも知れない。

意次は何かを得たようで機嫌良く木枯らしが吹き続く向島を辞した。

翌朝、明け五つ（八時）前に春江館で汗を流した春貞は母屋に足を向けると道場に続く小径をお文とその子お輝が務めのために歩いて來た。

「殿さま。おはようございます」

お文がお輝の頭を右手で下げながら声を上げた。

「おお、おはよう。今日も早いな。

診療所の始まりは四つからではないか…」

お輝の真っ赤なほっぺを指で軽く触れながら春貞がいふと、

「はい。でも準備が沢山ありますで、ぎりぎりだと患者さんに迷惑をかけますので…」

お文は春貞が何者であるかはまだよく知らなかつたものの、公方様らと直接話が出来る人だと聞かされ、緊張気味に答えた。

「そうか。ありがたいことよ。

そうだ：俺たちはこれから飯の時間だが、今日は一緒に居間に上がつてくれ。

笙船先生たちもおるでな」

磊落に春貞は声をかけ、断り方を考えている風のお文の背を押すように、そしてお輝の手を引き母屋に導いた。

「お文さん、さあさあ上がつてくれ」

春貞が言うもののお文は、

「畏れ多いことでござりますので…」

と躊躇するも遠慮を知らぬ子供のお輝はにこにこしながら上がり込んだ。

恐る恐る義足を外して居間を覗き込むようにしたお文だつたが、すでに座していだおよしや新界、そして弥生と友子が笑顔で手招きしているので入り口にちょこ

んと座り肩を丸くしていた。

「なにをしている。お文さんや、こちらに座りなされた。
笙船に促されてなんとか末席に座つたと思つたらその前に箱膳が置かれはじめた。

「えつ」

お文は絶句した。

お茶でも飲ませてもらえるのかとは思つていたが、皆と一緒に箱膳が置かれると
は夢にも思つていなかつたからだ。

「お文さん。朝飯を食べてきたかどうかは知らんが、一緒にな…お輝ちゃんも一
緒に膳を囲んでくれ。

今朝は急に誘つたで、残してもかまわんからな」

春貞が上座から声をかけたが、

「殿さま。あたしは使用人ですから身分が違います」と後ずさりし始めたが近寄った留吉が、

「最初はあつしもお文さんと同じだつたけど、旦那は一緒に仕事をする者たちは
一緒に膳を囲まなければならぬというお考えだ。

遠慮無くいただきましょうや」

そういうながらお文を膳の前に誘つた。

お文も仕方なく小さくなつて膳の前に座したが顔は上げられない。

「お文さん、お前さんは診療所の大切な仲間じや。わしと井之上先生とおよしきん、そしてお前さんの四人で切り盛りしなければならぬ。

わしがいうのも僭越だが、春さんの代わりに言つておくがな、これからは診療所勤めの際にはな、朝餉はここでこうしてお食べ。よいな……」

笙船の言葉に春貞や幸江も笑顔で頷いている。

お文の両眼から大粒の涙がこぼれ落ち、その母親の顔を珍しそうにお輝が見上げた。

ともあれ山盛りの飯に汁と漬物、そしてその日により料理人富四郎の工夫の一品が添えられる食事は小作農家の女房には縁のないものだつただけに一端箸をつけると自然に笑みが浮かんできた。

五

師走の半ば、例年のように印半纏を羽織つた「い組」の政五郎らが松飾りの準備をはじめた昼過ぎ、数十騎の人馬と共に大御所徳川吉宗が現れた。

政五郎は旗本の冷や飯食い、得田新之助を装つて市井を出歩く吉宗をよく知つていただけに周りにいる男たちに土下座を命じ己も、

「ははっ」と平伏した。

吉宗は政五郎に一瞬笑みの視線を送り母屋の玄関へと向かつたが、それと知つた春貞や幸江がこれまた平伏して迎えた。

「もう師走か。歳を重ねると一年は早いものよう。

春貞、相変わらずいきなり邪魔をするが許せ」

そういうが早いか、勝手知つたる客間へせかせかと向かつた。

床の間を背にどかりと座つた吉宗だつたが、田宮助左衛門とちよど遅めの昼餉を終えた小川笙船も挨拶のため春貞の隣で平伏した。

「おお、笙船ではないか。久しぶりだが壯健でなによりじゃ…」

と言つた後、少し間を置き、

「そういえば余も六十二になつたが、最近はちと困つたことになつてのう」
回りに女衆がないことを確かめたのか確認するように見回した後、

「ここだけの話しじやがな、小便が思うように出ないのじや。
なにか病氣かのう」

と笙船に向かつて問うた。

「ははつ。畏れながら個人差はあれど加齢もひとつの原因となり得ますが、五臓

六腑のお具合も関係しているかも知れませぬ。

この笙船、利尿を促すお薬をお渡しするのは簡単なれど御典医の方たちはすでに
処方なされておりましようや」

小川笙船は平伏したまま答えた。

「春貞、笙船。余はすでに隠居の身じや。

表を上げよ。お主らの仲間にになりたいのじや」

吉宗は破顔しながらも、

「勿論、城中の医者もいろいろと薬を処方してくれるし、承知かと思うが余も家
康様に習つて自身でも薬研を押すが、どういうわけか一向に効かぬのじや…お

お、これはすまんな

幸江が運んで来た茶を無造作に手にした吉宗は幸江が退出するのを確認しながら、

「出すものが出ないところはつらいものぞ」

とこぼした。

吉宗も実益のある学問や知識には大いに興味を示した。

事実薬を作るのも趣味の一つで、御座の間近くに「御薬部屋」を設けて薬研を押すこともあつた。

また作ればこの効用を確認したくなるのも人情で、側衆や小姓、さらには老中や若年寄、大奥の女中などに飲ませていたし、一部の薬は評判がよかつた為、一般の求めに応じて市井に流布もしたという。

もともと小石川養生所の元ともなった小石川薬草園は病弱な三代家光のために整備されたものだつたが、吉宗の時代になつて幕府の医療政策として整備されたのだ。

「上様：いや、ご無礼申し上げました：大御所様。仰せの通りこれは冗談では済まされませぬ。毒が体内に残つてしまひますでな」

笙船は医者の顔で訴えた。

しばらく無言でいた笙船は、

「服用されるかは大御所様のご判断としてこの笙船、医者の端くれとして聞き流せるお話ではございませぬのでこれから力を尽くし薬を処方してまいります。しばらくの間、御免くださりませ」

と平伏しつつもそそくさと居間を後にした。

「済まぬな春貞。笙船に余計な心配をかけてしまった」

茶を啜りながら吉宗が言い、ふと真顔になつた。

「どうだ春貞。その後屋敷の者が襲われることはないか」と問うた。

「はつ。あれからはございませぬ」

春貞が答えると、

「ふむ。それは上々だが、その事実は乗邑のりさとがこれまでの襲撃の主犯だと証明しているようなものではないか。

承知のように奴は家重により蟄居謹慎を申し渡された故、これまでのようにも老中

の力を持つて誰であれ操ることはできまいからのう」

吉宗は難しい顔をしながら言い切つた。

「御意。

大御所様。話柄を変えますがひとつお聞きしてよろしゅうございますか

春貞はよい機会だと考え、心に引つかかっていたことを口にした。

「なんなりと申せ」

吉宗は茶菓子に手を付けながら答えた。

「大御所様。過日登城の際に御自ら申されましたが、巷の五月蠅方には大御所様と上様の不仲説という話しがまことしやかに流れておるそうです。

单刀直入にお尋ねいたしますが、本当のところはいかがでござりますか」

春貞は政権移譲早々に幕政に混乱があつてはならじと言いにくいことをあえて口にした。

「余もそうした噂が早くも流れておるのは承知じやがな、その事実はない。

春貞、そこに嘘をいう必要はないでな」

吉宗は機嫌を損ねることなく即座に答えた。

「そうした噂はやはり新将軍が決まるまでの余の動搖を回りが敏感に受け取つて

いたからじゃろうて。

確かに余は迷いに迷つてお主の意見をここに聞きに来た。

そうであつたな」

「御意」

「しかし家重より次男の宗武の方が相応しいであろうと一時は考えたが、それは家重が憎いとか可愛くないということではないのじや」

「……」

「承知のように家重は言葉が上手く操れん。

親の余にも家重の申すことは残念ながらなかなかわからんのだ。それが原因だろうが余と家重の間には意思疎通ができていないという輩もいるし、中には幼少期から家重を遠ざけていたというまことしやかな噂まである。

しかしそれは見てきたような嘘じや」

苦笑いして吉宗は不仲説を否定した。

「畏れながら……」と助左衛門が断りながら、

「それがし、享保十年に御納戸同心の務めを辞しましたがその年はちょうど長福丸さまが元服され家重様となつたおりでございました」

と話し出した。

「うむ、そうであつたな」

「それがしは大御所様が長福丸さまを慈しむお話を多々耳にいたしましたが、その時節は仰せのようなお話しさなかつたと存じます」

「助左衛門。よう言うてくれた。

不仲説は多分に次期将軍選びを考えはじめたあたりから流された意図的な流言のような気がいたすがのう……」

吉宗が美味そうに再び茶菓子に手を伸ばした。

「御意。

畏れながら享保十三年でございましたそうですが、長福丸さまが痘瘡になられたとき、病状の軽いことを祈念され高田の八幡宮で流鏑馬やぶさめを催されたと耳にいたしました

助左衛門が言うと吉宗は頷いた。

この流鏑馬は家重が將軍になつても、家重の厄年にあたる寛延四年（宝曆元年・一七五一年）五月に同じく高田の馬場で厄除けの流鏑馬を催している。

また元服した年、吉宗は駒場野の鷹狩りに家重を伴っている。それが家重初めての鷹狩りだった。

父吉宗は学問の師として室新助直清（鳩巣）を付けただけでなく武芸にもそれぞれ師を選んで付けたが鷹狩りは鍛錬のためだとして勧めた。事実長福丸は回数は多くはないものの不自由な身体で出かけている。

吉宗の家重に対する親心はそれだけではなかつた。

「大御所様。確かに当時の家重様を生きた政治に触れさせるため、吹上で三奉行の訴訟の裁断を度々見学なされたり、外国使節の騎馬や番士の訓練にも同席されたと漏れ伺っております」

助左衛門が続けると、

「その通りよ。またな、城中だけに籠もつては世間というものを感じられぬ。そういう考え方小菅に別邸を造り、時々数日泊まらせてきた…。

家重は確かに病弱だし言葉が上手く操れん。したがつてその知能まで劣つていると考えた輩もおるようでな、様々な誤解を招いてきたようじや」

吉宗が大きなため息をついた。

事実家重は「小便公方」と揶揄され、その能力も疑問視された傾向があるが、知

能が劣っていたわけではないことはその将棋の実力を見ても明らかだつた。また自分の小姓だつた田沼意次を重用し家治の側用人に勧めたのは家重だし、人の能力を見極める優れたものを持っていた。

そういえば、一橋宗尹の娘保姫と後に島津家八代藩主重豪となつた又三郎の縁組みを決めたのも家重であつた。

重豪の「重」は、家重が自分の一字を与えて元服させたのである。その重豪は吉宗が竹姫を縁組みさせた島津継豊の孫で、重豪の娘が十一代將軍家斉の正室となり、それが幕末の天璋院につながるのだから興味深い。

「大御所様。そうした事実がありながらまことしやかな嘘の噂が流れるのは、それを言い出した者が幕政とは無縁の輩か、あるいは蒸し返しますが意図的に家重様の評判を貶めようとした者の仕業でございましょうな」
春貞が助左衛門と視線を合わせて頷きながら言い切つた。

そのとき、

「恐れ入りますが、大切なお話しあはお済みになられましたかな。
笙船、大御所様に服用していただく薬を調合してまいりました
小川笙船が客間の襖の影から声をかけた。

「おお、これは済まぬ。

御典医らに隠れて服用するわけにもいかぬが、何とか巧いこと話して使わせても
らおうぞ」

吉宗が破顔した。

そのとき開けた襖から弥生と幸江そして静香が膳を運んで来た。

「大御所様。すでにこのお時間でございます。

よろしければささやかな膳をご用意いたしましたのでご賞味いただけませぬか。

門前の方々にも握り飯などをご用意しておりますのでお許し願います」

と声をかけた。

「おおこれは済まぬな。

せつかくだから馳走になろうぞ」

吉宗は膝を叩きながら破顔した。

冬の日没は早く、向島の空は茜色に染まっていた。

あとがき

オリジナル時代小説「首巻き春貞」第十三巻をお届けする。

早速だが本編に登場する雲助の頭領、松谷久四郎は実在の人物だという。

とある西国大名の剣術指南役を酒が元で失敗し、流れついた箱根でその腕と器量を買われて頭目に祭り上げられた。

無論細かなあれこれが伝えられているわけではないが、酒が元で命を縮めたといふ。

しかし世話になつた雲助たちは墓を建ててくれ「あの世でも好きな酒を」と墓には盃と徳利を刻んで供養した。

その墓は街道脇にある駒形諏訪神社手前に「雲助徳利の墓」として現存している。

これほど魅力的な男を取り上げないわけにはいかないと「第九巻 密命」で初めて登場させたが、その後「第十二巻 拝謁」に続き本編ではかなりのページを割いて松谷久四郎の魅力に迫つてみた。

とはいえ、本編のタイトル「政権移譲」のとおり、本編一番の軸は吉宗が隠居したことで第九代将軍徳川家重が誕生したことだ。

将軍家重が誕生するまでには弟たちとの確執は勿論、老中松平乗邑により廃嫡されそうになつたりと幾多の困難が立ちふさがつたことは史実である。無論その要因の大きなこととして、家重には生まれながらの言語障害があり、身体も弱くまた小便公方と揶揄されるほど頻尿であつたために出向く先々に便所を設けるなどしなければならなかつたことが挙げられる。

ために普段は奥に引き籠もつてばかりいたが、人物を見極める優れた能力を持つていたし、ポイントはきちんと押さえて命を出していたようだ。

しかしこうした健康上の問題から知能にも問題がある人物と受け取られやすかつた。

また「酒色に溺れた」とも言われたが、確かに酒乱氣味で酒に溺れた感はあつたものの色に溺れた気配はないという。

なぜなら側室は二人だつたし、子供も二人しかいなかつた。

こうした誤解が多い家重が将軍になる過程では多くの混乱があつたものと思われる。

本小説では主人公春貞の諫言で吉宗が次期将軍に家重をと決断したことになつて
いるし、次男の徳川宗武を推した老中松平乗邑との鬭いも描いた。

さて、本シリーズも十三巻目をお届けすることになつたが、時系列にストーリー
を紡いでいくのは次巻十四巻「死去（仮題）」で完結にしようかと考えている。
もともと小石川養生所を舞台に始まつた「首巻き春貞～松平春貞一代記」だが、
主人公の春貞は当然としても八代将軍吉宗の存在、そして大岡越前守忠相の存在
が不可欠だつた。

しかし一七五一年というから本巻の時代から六年後に吉宗は亡くなり、それを追
うようにして忠相も死ぬ。であれば舞台設定の大道具を奪われた感じもして筆者
としては意欲を失わざるを得ないからだ。

一方、できることであれば吉宗が亡くなつた後、三〇年ほど経つた時代を描いて
みたいとも思つてゐる。

なぜなら十代將軍家治に重用された田沼意次が側用人だつた明和四年（一七六七年）から天明六年（一七八六年）あたりの時代は商人の力が強くなると共に蘭学
が盛んになり、平賀源内のような自由人が登場するわけで、時代小説の舞台とし
て大変面白そうだ。

またそうなれば主人公松平春貞は七八歳ほどになつてゐるはずで、ネタバレのようだがこれまで回りにいた愛すべき家族たちの多くはすでに亡く、孤高の天才老剣士が主人公というのも筆者にとつて興味津々なのである。

無論どういうことになるかは筆者自身にもまだ分からぬが、興味の向くままに筆を進めてきた本シリーズも何らかの結末を用意しなければならない時期に来たといえる。

平成三十一年一月二十九日

東京都多摩市の自宅兼仕事部屋にて

松田 純一

主な参考文献・資料（敬称略）

- 安藤優一郎「江戸の養生所」
- デイアゴステイニー「週刊江戸 小石川養生所の開設」
- 酒井シヅ「まるわかり 江戸の医学」
- 青木歳幸「江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年」
- 菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
- 菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
- 菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
- 菊池ひと美「お江戸の結婚」
- 森田健司「江戸の瓦版 庶民を熱狂させたメディアの正体」
- 江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
- 江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
- 野火迅「使つてみたい 武士の日本語」
- 山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
- 稻垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集 秘伝！NHK時代考証資料」

人文社「切絵図・現代図で歩く 江戸東京散歩」

立川博章「大江戸鳥瞰図」

柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書 付・新陰流兵法目録事」

柳生耕一平巖信「負けない奥義 柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」

村山知義「無刀の伝 柳生新陰流極意」

新人物往来社「剣の達人一一人 データファイル」

人文社「江戸庶民の食風景 江戸の台所」

松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」

大野恵造「江戸小唄総覧」

江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」

NPO法人 宗春口マン隊「徳川宗春伝」

深井雅海「江戸城御庭番―徳川將軍の耳と目」

若桜木虔「御庭番通史」

高埜利彦「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」

氏家幹人「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

- 塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」
- 塩見鮮一郎「資料 浅草弾左衛門」
- 塩見鮮一郎「江戸の非人頭 車善七」
- 三谷一馬「江戸年中行事図聚」
- 永井義男「図説 吉原事典」
- 塩見鮮一郎「吉原という異界」
- 山崎光夫「薬で読み解く江戸の事件史」
- 梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」
- 貝原益軒（著）／伊藤友信（翻訳）「養生訓」
- 杉田玄白／酒井シズ（現代語訳）「解体新書」
- 片桐一男「杉田玄白 蘭学事始」
- 長尾剛「話し言葉で読める『蘭学事始』」
- 梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」
- 歴史群像編集部・編「時代小説用語辞典」
- 大石慎三郎「大岡越前守忠相」
- 童門冬二「大岡忠相 江戸の改革力 吉宗とその時代」

羽生和子 「江戸時代、漢方薬の歴史」

高崎哲郎 「天一切ヲ流ス——江戸期最大の寛保水害・西国大名による手伝い普請」

山口 正之 「忍びと忍術」

山田雄司 「忍者の教科書」

長谷川正康 「江戸の入れ歯師たち——木床義歯の物語——」

山本博文（監修） 「江戸の銭勘定 庶民と武士のお金のはなし」

石川英輔 「実見 江戸の暮らし」

根岸鎮衛／長谷川強校注 「耳嚢（上・中・下）」

八幡和郎 「歴代天皇列伝」

高森明勅監修 「歴代天皇事典」

伊東宗裕構成 「別冊太陽 京都古地図散歩」

名古屋市博物館 「名古屋城下お調べ帳」

「V.A. / TRADITIONAL FOLK SONGS OF JAPAN」 CD

町田嘉章／浅野健二編 「日本民謡集」

服部竜太郎 「日本民謡集——ふるさとの詩と心」

歴史の謎を探る会 「日本人なら知つておきたい 江戸の商い——朝から晩まで」

三下晶也「徳川将軍家の真実」
Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上の例外を除き禁じられています。

くびま はるさだ せい けん いじょう
首巻き春貞 政権移譲（決定版）
まつだ じゅんいち
松平春貞一代記（十三）

2019年2月9日 第一刷

2020年5月12日 第二刷（決定版）

まつだ じゅんいち
著者：松田純一

<http://www.mactechlab.jp>

表紙デザイン：Junichi Matsuda
